ISSN 0910-3090

國語國字

國語問題協議會報
平成二十四年十一月十日 發行

第百九十八號

目次

第九十回講演

古代日本語より……淺川哲也　3
日本の音を考へる……藍川由美　10

寄稿

福田恆存先生追懐……谷田貝常夫　22
美しい日本語の再發見……大喜多俊一　28
縦書の意識と感覚……若井勳　36
現代假名遣ひの方針を英語に適用すると……柏谷嘉弘　40
教育敕語と擴張ヘボン式による轉寫……上西俊雄　44
「ゐ」「い」、「ゑ」「え」、「わ」「は」等の音韻上の相違……中井茂雄　48
日中英　言葉の雑學（その四）……高田友　51
和歌……安藤路翠　54
後書……谷田貝常夫　56

題字・插書　近藤祐康

古代日本語より
―失はれた音聲言語の復元―

淺川　哲也

はじめに

ただいま御紹介にあづかりました首都大學東京の淺川哲也です。最初にわたくしごとからお話をいたしますが、私は昨年（平成二三年）の夏に東京書籍より『知らなかつた！日本語の歴史』といふ小著を刊行いたしまして、その本の中で、古代日本語の發音の變化と日本語の假名遣ひの歴史との關係を採り上げて少しくはしく書いたことがあります。國語問題協議會の會員でいらつしやる中澤伸弘先生がこの拙著をお讀み下さり、以前から中澤先生の知己を賜はつてをりましたところから、中澤先生から國語問題協議會に御紹介下さり、本日の講演會にお招きを頂いたといふ次第です。さて、今回は「古代日本語より」といふ大きな講演題目をいただきましたが、古代の日本語の發音が何故わかるのか、といふお尋ねを併せて頂きましたので、本日はそのやうなお話から致したいと思ひます。

一、「古代日本語」とは何か

最初に「古代日本語」とは何か、といふことからお話し致します。私のやうな研究者といふ者は、何かひとつのことについて説明するに際しては、それがどのやうに定義づけられるのかといふことにたいへんにこだはります。學問はひとつひとつの用語について、いちいちきちんと定義づけをしないと、客觀的な議論が成立たなくなるのです。これをないがしろにしますと、それはもはや學問ではありません。

さて、ひとくちに「古代日本語」と言ひましても、それは「古代語」と言つても大體同じ意味になりますが、日本語における古代語とは、日本語の歴史（日本語史）の時代區分の名稱の一つです。次に掲げる日本語史の時代區分圖を御參照下さい。

古代語
- 上代語……　推古朝～奈良時代末（6世紀～8世紀末）
- 中古語……　平安時代（8世紀末～11世紀末）
- 中世語……
  - 院政・鎌倉時代（11世紀末～14世紀末）
  - 室町時代（14世紀末～17世紀初）

近代語
- 近世語…江戸時代
  - 前期上方語（17世紀初～18世紀中頃）
  - 期江戸語（18紀初～19世紀中頃）
- 現代語…明治時代以降（19世紀中頃～）

日本語の歴史を古代語と近代語の二つに分けてしまふ二區分法といふ考へ方があります。これに從ふと、古代語とはだいたい飛鳥・奈良時代から室町時代末期までに行はれてゐた日本語を指すことになります。その古代日本語は當時の都が置かれてゐた飛鳥・奈良・京都などを中心とする地方で行はれてゐたことばです。つまり、古代日本語とは現在の近畿地方で行はれてゐる方言の先祖といふことになります。ある國家の政治・經濟・文化の中心地で行はれてゐる代表的な方言のことを中央語と言ひますが、古代日本社會の中央語は飛鳥・奈良・京都などで使用されてゐた日本語であり、それが古代日本語といふことになります。

二、音聲言語と文字言語

次に、音聲言語についてお話し致します。およそ人間社會における言語といふものはまず音聲言語から發生し、かなり時代が後れて文字言語（書記言語）が現はれます。音聲言語と文字言語とは同じ言語であるにしても、著しく性格を異にします。

音聲言語には、次のやうな特徴があります。まづ、音聲言語を知覺する感覺は聽覺による。音聲言語は發したその瞬間に永久に消滅する。音聲言語は言語主體（話し手）とその聞き手との間のみで成立する。音聲言語は話し手と聞き手の間に於いて時間と場所とが限定される。音聲言語は方言と共通語との兩方に使はれる。音聲言語は主觀的・情緒的である。音聲言語は變化が激しい。音聲言語はそのひとの聽覺能力が正常であれば無自覺に習得することができる。音聲言語は人類集團であれば例外なくこれを有してゐる。

これに對して、文字言語には次のやうな特徴があります。文字言語を知覺する感覺は視覺による。文字言語は記錄として殘る。文字言語は言語主體（書き手）から分離できる。文字言語は時間と場所の制約を受けない（書き手の死後であつても讀むことができる）。文字言語は主に共通語で使はれる。文字言語は客觀的・知的・情報的である。文字言語は保守的で變化しにくい。文字言語は自覺的な努力がなければ習得することができない。獨自の文字言語をもたない人類集團がある。

傍線部を付した特徴が、古代日本語についてのお話と重

要な關はりがあります。現在では、古代日本語を話しことばとして話すことのできる人間は總て死に絶えてしまひましたので、實際の音聲言語としての古代日本語を耳にすることはもはや不可能です。私たちは古代日本語を文字言語としてしか知ることができません。音聲言語は音聲として發した瞬間に消滅するという性質のために、時代を經る間に激しく變化しますが、文字言語は記錄として殘り、また教育や學習によつて習得されるので、保守的に維持されるといふ明らかな傾向があります。これが話しことばと書きことばとが次第に乖離してゐく原因のひとつです。音聲言語は現生人類であれば例外なく有してをりますが、多くの民族は獨自の文字言語を有してはをりません。文字言語を獨自に有する集團はむしろ少數派といふべきです。文字言語が現はれたのは中央集權的な都市型の大文明が興つたところにだいたい限られます。中央集權的な大文明は統治のための高度な社會機構や官僚機構が發達しますので、必然的に言語を記錄するための文字言語を必要とするのです。

實は、わが日本語は、日本語を書き表はすための日本語獨自の文字言語といふものをそもそも有してをりません。日本語を書き表はすための文字言語は平假名・片假名ともに中國語の文字言語である漢字の借用によつて作られた文字です。わが國の古代に於いて漢字の渡來以前に存在してゐたと平田篤胤などが主張するいはゆる神代文字のごとき說は、日本語研究者の立場からは、議論に値しない嘘僞りであると申上げることができます。もし本當に古代日本人が、みづからの音聲言語を書き表はすことのできる文字言語を獨自に有してゐたのであれば、私たちの先祖の古代日本人が、異言語の文字言語である漢字を日本語の表記法として借用し、最終的に平假名・片假名のやうな日本人の文字文化として使ひこなせるやうになるまでに、長い間血のにじむやうな辛苦を重ねてきたといふ重い歷史的事實と明らかに矛盾することになります。

三、古代日本語の發音をどうやつて復元するのか

音聲言語は、その音聲言語を記錄した文字言語を分析することによつて復元することができます。古代日本語の音聲言語（發音）を復元するための大きな手がかりは、漢字と梵字（古代サンスクリット文字）の二種類の文字言語です。

古代に於ける中國語の音韻については、中國の韻書『廣韻』（一〇〇八年成）の半切（漢字の字音を表はすために他の漢字二字の字音の最初と最後の音で示す方法。漢字「東」の字音「トウ」は半切で「德紅切」と表はす。「德」の「ト」

と「紅」の「ウ」を併せると「トウ」となる）や中國語諸方言、また古代サンスクリット語の發音などから、スエーデンの中國學者カールグレン（一八八九～一九七八）や、日本の藤堂明保（一九一五～一九八五）らによつてほぼ解明されてゐます。また、古代サンスクリット語の音韻については、そもそも古代サンスクリット語はインド・ヨーロッパ語族に屬し、その文字言語である古代サンスクリット文字（梵字）はアルファベットやローマ字のやうな表音文字ですので、かなりの程度で音價推定が進んでゐます。

日本の上代（奈良時代以前）の文獻で「萬葉假名」として使はれてゐる文字は、中國語の文字言語である漢字です。漢字は、當時の漢字の古代中國語音としての復元された音聲がありますし、また他の音韻資料として古代サンスクリット語の文字言語（梵字）の推定音價などがあり、これらの音韻資料を手がかりとして、古代日本語に於ける音聲言語をある程度推定し復元することができるのです。

四、萬葉集歌にある二種類の表記

上代の代表的な文獻であり、古代日本語の最大の言語資料である『萬葉集』（八世紀）は、いはゆる「萬葉假名」で書かれてをります。萬葉假名には、古代日本語を漢字で書き表はすための用字法がいくつかありますが、大きく分けて訓字主體表記と音假名主體表記の二種類があります。

音價推定の上で重要なのは、日本語の音聲言語を記錄するために中國語としての漢字の發音を借用した音假名です。漢字が中國語文字として有する意味とは無關係に、漢字の字音を使つて當時の日本語の音聲を書き表はさうとしてゐるのが音假名です。從つて、音假名で書かれた萬葉假名の當時の漢字音が推定できれば、古代日本語の發音をある程度復元することができる、言ひ換へれば音假名を當時の中國語音で讀めば、それは古代日本語で萬葉歌を音讀するに等しいといふわけです。『萬葉集』にある音假名主體表記で記錄された歌と、それを漢字假名交り文に書き改めたものの例をいくつか次に示します。

余能奈可波　牟奈之伎母乃等　志流等伎子　伊與余麻須萬須　加奈之可利家理

世の中は空（むな）しきものと知る時しいよよますます悲しかりけり

〈卷五・七九三〉

和我屋度能　伊佐左村竹　布久風能　於等能可蘇氣伎　許能由布敝可母

我（わ）がやどのいささ群竹（むらたけ）吹く風の音のかそけきこの夕（ゆふへ）かも

〈巻一九・四二九一〉

宇良宇良爾　照流春日爾　比婆理安我里　情悲毛　比登里志於母倍婆

〈巻一九・四二九二〉

うらうらに照れる春日にひばり上がり心悲しもひとりし思へば

音假名表記のうち、これらの萬葉歌のように、漢字一字で古代日本語の音節ひとつを書き表はさうとした「一字一音」の方式で記錄された萬葉歌は、特に重要な言語資料であるといへます。

古代日本語を古代サンスクリット語によつて記述してゐる言語資料もあります。平安時代初期の天台宗の學僧であつた圓仁（七九四～八六四）は、最澄の弟子でしたが、八三八年、四十五歳のときに入唐し、異國である唐の地で佛教彈壓の災禍に捲きこまれるなどして苦學しながら、『在唐記』（八四二年頃成）を書き上げました。『在唐記』とは、圓仁自身の平安時代初期に於ける古代日本語の發音と、當時の唐に於ける中國語音と、梵字で記された古代サンスクリット語の發音との三種類の言語音が比較されてゐる資料です。『在唐記』では、「本鄕」で日本語を指し、「唐音・大唐音」で當時の中國語を表はしてをります。『在唐記』は古代日本語の音聲を知るための實に貴重な資料なのです。

五、古代日本語の音韻の實態

以上、申上げてきたやうに、古代日本語の音聲言語について國語學といふ學問分野で嚴密な學問的方法によつて長い間研究されてきました。私がお話ししてをりますことは、その長い研究の蓄積による學問的な成果に負ふものであります。

古代日本語の音聲言語がどのやうなものであつたか、またその古代日本語の音韻がどのやうに變化して、その音韻變化による日本語書記法の混亂がやがては日本語の書記法の歷史上に「假名遣ひ」といふものをもたらすに至つたかといふことについて簡單に纏めてまゐりたいと思ひます。

五―一、ア行とヤ行とワ行

古代日本語のア行「あいうえお」の音聲は現代日本語とほぼ同じであると考へられてをり、國際音聲字母（IPA）で表はしますと［a i u e o］となります（いはゆる「上代特殊假名遣ひ」における母音の問題を除く）。しかし、古代日本語のヤ行「やいゆえよ」の音聲は［ja i ju je jo］で、「ヤ・イ・ユ・イェ・ヨ」といふ發音です。また、ワ行「わゐう

ゑを」の音聲は［wa wi u we wo］で、「ワ・ウィ・ウ・ウェ・ウォ」といふ發音です。

從ひまして、古代日本語におきましては、ア行の「い（以）」とワ行の「ゐ（爲）」とは全く異なつた別の發音を表はします。同樣に、ア行の「え（衣）」とヤ行の「え（延）」とワ行の「ゑ（惠）」はそれぞれに異なつた發音であり、ア行の「お（於）」とワ行の「を（遠）」も互に異なつた發音です。このことは、（）内に示した萬葉假名の漢字の字音がそれぞれ異なりますので、發音そのものがそれぞれ異なつてゐたことがわかります。また、これらの萬葉假名に使用されてゐる漢字の古代漢字音の點からも明白な事實です。

しかし、鎌倉時代までにア行の「え」・ヤ行の「え」・ワ行の「ゑ」の三種類の發音が合流同化して一種類の音聲［je］になつてしまひました。「い」と「ゐ」も同樣で［i］一種類になり、「お」と「を」は［wo］の一種類に同化しました。

五―二、ハ行

現代日本語では、ハ行は「ハ・ヒ・フ・ヘ・ホ」と發音します。これを國際音聲字母で表はすと、［ha çi Φu he ho］となります。しかし、奈良時代以前には古代日本語のハ行の子音はすべてP音であつたと考へられてゐます。音聲學の觀點から見ると、世界的にみて兩脣破裂音の有聲音（聲帶が振動する音）［b］に對應する兩脣破裂音の無聲音（聲帶が振動しない音）は［p］です。日本語の場合、有聲音は濁音、無聲音は清音という整然とした對應となつてゐますので、奈良時代以前の日本語のハ行は、清音がパ行、濁音がバ行といふ對應關係があつたはずです。つまり、奈良時代以前の日本語では、ハ行は「パ・ピ・プ・ペ・ポ」と發音されてゐたわけです。この事實は多くの言語資料によつて裏付けることができます。

萬葉假名で日本語の「は」を表はす「波・播」の漢字としての古代中國語音はいずれも［p］で始まる音であることが容易に確認できます。また、萬葉假名で日本語の「は」を表はす漢字「波」は、圓仁の『在唐記』では「本鄕波字音」として現はれてをりますが、この古代日本語「波」の發音について、圓仁は梵字「प」でもつて示してゐます。梵字「प」は古代サンスクリット語の發音では［pa］であつたと推定されてゐます。古代日本語のハ行音がパ行音であつたといふことは、奈良時代に使はれてゐた語彙の多くを方言語彙として現代まで傳へてゐる琉球方言の中に、「パナ（花・鼻）」といふハ行の發音のしかたがあることからも推測できます。

また、古代日本語には、現代日本語のハ行の子音のひとつ［h］が音韻としては存在してゐなかつたことも『在唐記』の記述によつてわかります。漢字「賀」の日本語に於ける字音は「ガ」ですが、漢字「賀」は梵字では「ꣳ」で記されてゐます。この梵字の發音は［h］の有聲音の［ɦa］です。これは唐代の中國語音では漢字「賀」が［ɦa］に近い音であつたといふことを意味します。古代日本語ではハ行の子音は［p］であつて［h］ではなかつたので、つまり、古代日本語には［h］の發音がそもそも存在してゐなかつたので、漢字「賀」の字音を「ハ」とすることはできなかつたのです。中國語の［h］は古代に日本語では カ行の子音で置き換へられます。無聲音（清音）「カ」の有聲音（濁音）は「ガ」ですから、現在でも日本語では漢字「賀」の音讀みは「ガ」のままです。

五―三、タ行

和語「土（つち）」を表はす一字一音の萬葉假名は「都知」です。「都」と「知」の古代中國語音を調べてみると「都知」の發音は［totie］となります。「土」のことを古代日本語では「トゥティ」と發音してゐたことになります。つまり、古代日本語では、タ行は「タ・ティ・トゥ・テ・ト」と發音されてをりました。これが、本來の日本語のタ行の發音なのです。

餘談になりますが、私には當年五歳になる長女がをりまして、最近その娘のためにパソコンで現代假名遣ひの五十音圖を作つて自宅の居間の壁に貼つてやりました。市販の五十音圖ですと、や行のところを「やいゆえよ」ではなく「や・ゆ・よ」としたり、わ行を「わいうえを」ではなく「わ・を・ん」などと、五十音圖の構造にまつたく無知な（無恥な?）シロモノが出回つてをりまして、そのやうな誤つた五十音圖を私は娘にをしへたくはありませんから、正しい五十音圖を自分で作つて貼つておいたわけです。そうしますと、あるとき、娘が五十音圖の「た行」のところを「タ・ティ・トゥ・テ・ト」と發音してゐたのを聞いたのです。これには驚きました。そのときにビデオなどに撮つておけば良かつたと思つてをります。つまり、た行を「タ・ティ・トゥ・テ・ト」と發音するのが日本語の本來の姿であり、自然な發音なのです。「タ・ティ・トゥ・テ・ト」といふ發音は、子音が總て［t］一種に統一されてゐて、こちらの方が發音が容易なのです。五歳の長女は、五十音圖の構造すなはち行は子音に於て統一性があるといふ原理を感じ取つて、「た行」を同一の子音で「タ・ティ・トゥ・テ・

ト」と讀んだのだと思はれます。現代日本語の「チ・ツ」の子音は破擦音といひまして、實は室町時代の頃に發生した新しい發音なのです。

五―四、サ行

古代日本語のサ行の子音は推定が困難な子音です。日本語の「サ」を表はす萬葉假名は何種類もあるのですが、それらの萬葉假名の漢字音（上古音・中古音）をひとつひとつ調べてみますと、次に示すやうに［ts］［tʃ］［ʃ］［s］と四種類もの子音が現はれてしまふのです。

「佐・左」：［tsar］［tsa］、「差」：［tsǎr］［tsǎ］、「作」：［tsak］［tsak］、「舍」：［ʃiǎg］［ʃIǎ］、「散」：［san］［san］、「沙・紗」：［sǎr］［sǎ］

萬葉假名に於けるこの事實は、古代日本語のサ行子音が音聲としては、例へば「サ」であれば「ツァ」・「チャ」・「シャ」・「サ」の四種類の音聲が存在してゐたことを示唆してゐます。因みに、鳥の名稱である「スズメ」とは、本來この鳥の鳴き声の「チュチュ」を寫した名前であると言はれてゐます。

奈良時代以前の古代日本語のサ行の實態はこのやうに明らかではありませんが、平安時代に於けるサ行の發音はだいたい「シャ・シ・シュ・シェ・ショ」であつたらうと推定されてゐます。漢語「武者」を「むさ」と假名で表記してゐることなどからそれがわかります。

六、萬葉假名と歴史的假名遣ひとの關係

さまざまな具體例を擧げてお話をしてまゐりましたが、ここで纏めますと、萬葉假名のうち、特に一字一音式で表記された萬葉假名とは、古代日本語の當時の發音を漢字を使つて正確に寫し取つたといふ性質のものです。萬葉假名が使はれてゐた時代は日本語の發音と表記とが完全に一致してゐた時代であり、日本語の表記にとつてはまことに幸福な時代でした。しかし、平安時代の中ごろから古代日本語の音聲言語（發音）に急激な變化が生じ始めました。變化が生じた原因にはいろいろありますが、最大の原因は、この時期から古代日本社會が崩潰を始めたことにあらうと私は考へてをります。社會が崩潰し、動搖するときに言語運用は動搖します。すなはち音聲言語にも激しい變化が生ずるのです。

平安時代中ごろから生じた古代日本語の音韻變化によつて、平安時代末期から鎌倉時代にかけては、かつての萬葉假名のやうに、發音のとほりに假名表記をすることができなくなつてしまひました。「い」と「ゐ」と「ひ」、「お」と

「を」、「え」と「え（ヤ行）」と「ゑ」のそれぞれの間にあつた發音の區別が消滅し、嘗てのやうに音聲言語の區別によつて假名の書き分けをするといふことができなくなつてしまつたのです。

この假名表記の混亂した狀況下で、藤原定家（一一六二～一二四一）の考案した「定家假名遣ひ」が現はれました。定家假名遣ひは、低いアクセントでは「お」、高いアクセントでは「を」と書き分けるといふやうに平安時代末期の京都アクセントに假名遣ひの基準の一部を置く假名遣ひでしたが、奈良時代の發音と平安時代末期の發音とには大きな相違が生じてゐたため、定家假名遣ひは『萬葉集』などにある萬葉假名の表記とは完全には一致しなくなつてしまひました。しかし、この定家假名遣ひが事實上、その後の日本語の正書法となりました。

江戸時代の國學者である契沖（一六四〇～一七〇一）は、『萬葉集』研究の立場から定家假名遣ひを明確に否定し、萬葉假名に基づく日本語書記法「契沖假名遣ひ」を提唱しました。これが歴史的假名遣ひの原型であることは言ふまでもありません。從ひまして、歴史的假名遣ひの根據は、一字一音式の萬葉假名の表記にあります。契沖が成し遂げようとしたのは、日本語の正書法を定家以前の、上代の時代の萬葉假名の正しい形に戻さうとしたことです。

古代日本語の音聲言語を中心にして考へますと、歴史的假名遣ひとは、古代日本語の音聲言語を文字言語にそのまま寫したもの、すなはち古代日本語を話してゐた古代日本人の聲そのものであると言へるのです。

【參考文獻】

淺川哲也（二〇一一）『知らなかつた！日本語の歴史』東京書籍

藤堂明保（一九七八）『學研漢和大辭典』學習研究社

ヴィディヤランカール・中島巖（二〇〇二）『サンダハンの入門サンスクリット』東方出版

【付記】

本文中に於ける梵字の掲出には『梵字鏡　湧出窓』（文字文化協會・文字鏡研究會）を使用しました。御惠與下さつた谷田貝常夫氏に厚く御禮を申し上げます。

音樂で讀み解く國歌「君が代」

藍川由美

日本の音を考へる
―海人族と舟と琴

平成十年、關西電力（株）舞鶴火力發電所の建設に先立つて發掘された浦入遺跡で、約五、三〇〇年前の地層から幅約〇・八メートル、推定全長八～一〇メートルの丸木舟が發見されました。繩文時代前期の舟としては最大級で外洋航行の可能性が指摘されると同時に、一段高く造られた石垣の上に舟首を南に向けて砂に埋まつてゐたことから、祭祀に使はれた可能性もあるやうです。

『日本書紀』の神武天皇が東征を思ひ立つ場面、「鹽土老翁曰東有美地青山四周其中亦有乘天磐船而飛降者余謂彼地必當足以恢弘大業光宅天下蓋六合之中心乎厥飛降者謂是饒速日歟何不就而都之乎～」に天磐船と饒速日命が出てきます。饒速日命の別名は彥火明命で、丹後國一宮の籠神社を司る海部氏の始祖とされてゐます。その海部氏に傳はる「籠名神社祝部海部直等之氏系圖」（貞觀年中書寫）は、現存する日本最古の系圖として國寶に指定されてゐます。

ともあれ、海人族が五、三〇〇年以上前から舟を操つて生活してゐたことが明らかになりました。

舟と琴にまつはる話が、『古事記』仁德天皇の條、『日本書紀』應神天皇の條にあります。「枯野」といふ名の舟が古くなつたので鹽をとるために燒いたら、どうしても燒け殘る木があつたので不思議に思ひ、天皇に獻上すると琴を作られました。その琴の音が遠くまで響く様子を詠んだのが次の歌です。

枯野鹽燒其餘、琴作、搔彈由良之門、門中海岩觸立浸欄木亮々

カレノヲシホニヤキシガアマリコトニつクリカキヒクヤユラノトノトナカノイクリニフレタつナツノキノサヤサヤ

この歌は『古事記』仁德天皇の條に「志都歌の歌返」と書かれてゐるため、あるいは『琴歌譜の二曲目「茲都歌の歌返」と關聯があるかもしれません。同譜一曲目の「茲都歌」は『古事記』雄略天皇の條にも採られ、その「歌返」は『古事記』應神天皇の條に關聯があります。同じく『琴

歌譜』の「宇吉歌」が『古事記』雄略天皇の條に、「酒坐歌」が『古事記』仲哀天皇の條と『日本書紀』神功皇后の條に、「茲良宜歌」が『記』『紀』ともに輕の兄妹の條に收められてゐます。

平成二十四年には青森縣八戸市の約三、〇〇〇年前（繩文時代晩期）の是川中居遺跡から、世界最古の現存出土弦樂器の可能性がある木製品が出土しました。長さの最大が約五五センチ、幅が約五センチ、厚さが約一センチの細長いヘラ型、上部に四角い突起、下部に直徑約一ミリの穴や刻みがあり、彌生時代の登呂遺跡などから出土した原始的な琴と似てゐることから、弘前學院大學・鈴木克彦講師（考古學）らが「繩文琴」と命名したさうです。

これらの發見は、繩文時代の日本列島に豐かな文化があつたことを我々に語りかけてくれます。

彌生時代の遺跡からも琴や彈琴埴輪が出土してをり、琴を彈く埴輪が膝の上に置いて演奏してゐるのと同じ四絃または五絃の琴は、現在の和琴のルーツと見られてゐます。さうしてこれまでの出土品から、關東の琴は四絃、九州の琴は五絃だつた可能性が指摘されてゐます。

ところが、天平勝寶八年（七五六）に光明皇后が東大寺の盧舍那佛に奉獻した聖武天皇の遺品などを收めた正倉院には北倉と東寶倉にいづれも六絃で全長が二メートル近い琴が殘され、獻物帳に「檜木倭琴二張」と記されてゐます。他の倉に殘されてゐる殘闕を合はせて十張ほどの和琴があつたのではないかと推測されてゐますが、收藏された和琴が六絃のみだつたのは、天智天皇九年（六七〇）頃に琴制が六絃に定められたのち、九州の五絃、關東の四絃が使はれなくなつたからではないでせうか。

日本の雅樂は大寶元年（七〇一）に雅樂寮が創設されて以降、神龜五年（七二八）には日本古來の歌舞（神樂歌・東遊・久米歌等）を別に管轄する歌舞所が設置されたことで、日本固有の音樂と渡來音樂を整理しつつ形を調へていつたやうです。

天平六年（七三四）に遣唐使が持ち歸つた七世紀末頃に唐の則天武后の命で編纂された全十卷の音樂理論書『樂書要錄』は、中國では散逸してしまひましたが、日本には卷第五、六、七と殘りの卷の一部が傳存してゐます。かうした理論書を踏まへ、承和七年（八四〇）に樂制改革（雅樂の日本化）が始まります。

貞觀元年（八五九）には宮中の清暑堂において御神樂が行はれました。宮中などごく限られた場所で行はれる「み神樂」に對し、全國各地にある神社などでの歌や舞の奉納を

「お神樂」や「里神樂」などと呼んでゐます。そもそも「里神樂」とは平安期に宮廷の樂人が石清水八幡宮、賀茂神社、祇園、春日大社などの社頭で行ふ神樂を指してゐましたが、現在では宮内廳の樂師ではなく、一般の愛好者によつて行はれるものも「里神樂」と呼んでゐるやうです。

石清水八幡宮（京都府八幡市）では延喜十四年（九一四）から年に二回、戰國時代と明治維新後の一時期を除き、祭神である應神天皇の生誕日（十二月十四日）などに非公開で御神樂を行なつてきたさうです。

宮中内侍所（ないしどころ）の御神樂は『江家次第（がうけしだい）』『公事根源（くじこんげん）』等によれば、永延元年（九八七）一條天皇の御代（九八六～一〇一一）に始まり、最初は隔年、承保年間（一〇七四～七七）からは毎年行はれるやうになりました。御神樂ノ儀がおほよそ完成されたのは一條天皇の長保四年（一〇〇二）とされ、樂家錄の卷之一「一條院御定之目錄」に三十數曲の歌および舞曲の題が記されてゐます。ただし現在まで傳承されてゐるのは十數曲ほどださうです。

一條院御定之目錄

庭燎　阿知女

採物之部

榊　幣　篠　弓　鉾　杓　韓神

大前張之部

宮人　木綿志天　難波潟　前張　階香取

井奈野　脇母古

小前張之部

薦枕　閑野　磯等　篠波　殖槻　總角

大宮　湊田　蚕

雜歌之部

千歳　早歌　星　晝目　弓立　朝蔵　其駒

竈殿　酒殿

十四世紀初頭に成立したとされる『八幡愚童訓（はちまんぐどうきん）』に日本神樂の創始者は「安曇磯良（あづみいそら）」とあります。「安曇磯良と申す志賀島大明神」ともあるやうに、志賀海神社（福岡市東區志賀島）を本據地の一つとしてをり、平成二十一年（二〇〇九）まで代々阿曇家の當主（たうしゅ）が宮司をつとめてゐました。

「一條院御定之目錄」にある「磯等」（「磯等前（いそらがさき）」「磯良崎」とも）といふ神樂歌は、平安末期書寫の『鍋島本神樂歌』に「貞觀年間（八五九～八七七）神樂歌に撰定された」と注記されてゐますが、神道研究の第一人者・西田長男（一九〇九～八一）氏は『日本神道史研究』第十卷「古典編」の序文に

かう書いてゐます。

海人族の本宗たる安曇氏がその祖神としてもちいつく、筑前国は志賀島に鎮座の志賀海神社の神事芸能として発祥したと思われる磯良舞い（細男舞い）は、やがて、そのいわゆる志賀白水郎の族人たる傀儡子と呼ばれる巡遊伶人たちによって、わが國土の至らぬ隈なく持ち運ばれ、そうしてその土地土地に根付いた。なかんずく、宇佐八幡宮を経て石清水八幡宮へと伝えられ、かくして宮廷の御神楽に入って、その御神楽ならびに御神楽歌を成立せしめるにいたった一つの系統は、もっとも注目に値するであろう。――ただし、宮廷の御神楽へ磯良舞いの入ったのは、石清水八幡宮を経てでなく、これよりはやく、すでに奈良朝以前のことではなかったかと思われる――

次の『續日本紀』巻第十一・天平三年（七三一）の記述は、『鍋島本神樂歌』にある「年間」より前に筑紫の細男舞ひが宮中に入つてゐたことを裏づけてゐます。

秋七月乙亥。定雅樂寮雑樂生員。大唐樂卅九人。百濟樂廿六人。高麗樂八人。新羅樂四人。度羅樂六十二人。諸縣舞八人。筑紫舞廿人。其大唐樂生、不言夏蕃。取堪教習者。百濟・高麗・新羅等樂生、竝取當蕃堪學者。但度羅樂。諸縣。筑紫舞生、竝取樂戸。

また西田氏は、折口信夫博士の『日本文學啓蒙』（一九五〇）から、下記の説を引用してゐます。

神遊びとは、神事舞踊の意味で、物部の鎮魂に神遊びの這入つたものが、神樂である。神樂は海部の系統の神遊びで、海部が石清水の神を祀る時に謠ふたものである。神樂歌譜は、此石清水系統の神樂に關するものであつたらしい。（中略）

今の神樂にも「阿知女作法」といふことを行ふ。（中略）阿知女は固有名詞で、阿度部磯良神を呼ぶのである。於々々々とは其に答へる神の聲である。太平記（巻三九）によると、阿度部磯良神はひどく醜い神で、顔を見られることを嫌ふて、神功皇后の朝鮮へお出でになる時に、海から中々出て來なかつたから、神樂を催して呼び出したといふ。此であどめ・安曇を訛つてあちめとなつたことが訣るのである。阿度部磯良神は八幡系統の神である。だから神樂は、大歌とは別系統の新しいものであつて、

石清水がもとで、宮中に移つたものなのである。尙、其證據とも見るべきは、神樂の朝歌の初めの千歲法に、「志加さへづる聲」と割り註を加へた本のあることである。此は、筑紫志賀島の海人の囀りのやうに謠ふといふことなのである。又、今の神樂の祕曲に、磯良前といふのがあつて、（中略）此を舞ふと變事が起るといふが、此も磯良と關係のあるもので、かたがた神樂は、海人から宇佐・石清水へ、そこから更に、宮廷へ這入つたものであることが考へられる。

神樂の創始者「安曇磯良」に關して西田氏はさらに、志田延義博士が『先代舊事本紀』卷三天神本紀から饒速日尊の天降の際の供奉神「船長 跡部首」「梶取 阿刀造」を、小野祖教博士が同書の天孫降臨に際して供奉・防衞にあたつた三十二神のうち「天鈿賣命。猿女君等祖。」と「八意思兼神兒天表春命。信乃阿智祝部等祖。」を擧げたと付記した上で、小野博士の「神樂は人長たる阿智祝が猿女や中臣や忌部を率ゐて奉仕すべきもので、阿智祝がサルメと同じやうにアチメと稱して、祀職團を代表してゐたらしい」との說は根據が薄弱であると指摘してゐます。また折口博士の「阿知女は鈿女命の義だ、といふ通說は、當らぬ考へである」との斷言を否定し、もとの名を「珍彥」と言ふ椎根津彥が龜の甲に乘つて現れて皇孫の御船を導き奉つたことが磯良神と同じであること、猿田彥神の妻神天鈿女命の「うづめ」と「うづひこ」が對稱語であること、かつて猿女君氏が志摩國の海人部の伴造・宰領者であつたことなどから、神樂歌「磯等前」で筑前志賀島と伊勢・志摩の「磯良ヵ崎」が二重寫しになつてゐる（天鈿女命も安曇磯良も同じ海人族だつたのではないか）と結論づけました（以上、西田長男『神樂歌の源流』より）。

なほ、上の折口博士の文中にある「志加さへづる聲」は、そのメロディーから、海人が鹿の追ひ込み獵の時などに鹿の鳴き聲を眞似て發する聲、あるいは鹿の鳴き聲であらうと私は解釋してゐます。

さて、『三代實錄』の貞觀十八年（八七六）正月二十五日の條に、毎年春秋の祭日に香椎廟宮の神前で志賀島の白水郎が男女十人づつで風俗樂を行なつてゐたとの記述があります。西田氏はこれを「筑前國香椎宮志賀白水ノ風俗ノ歌」なるものにほかならないと書いてゐますが、その歌詞に「君カヨハ、チヨニヤチヨニ、サヽレ石ノ　イハホト成テ」が

含まれてゐます。この風俗樂、いはゆる風俗ノ歌は、遅くとも奈良朝の末、寶龜十一年（七八〇）以前から現在まで行はれてゐますが、歌詞の一部が變はり、現在は「コケノムスマテ」まで入つてゐます。歌謡といふより問答（台詞）に近いものです。

この「君カヨハ」の歌が『神楽歌』としても歌われていたろうことは、天文十七年（一五四八）書寫の、『神楽譜』・『催馬樂譜』・『東歌譜』・『歌披講』などを収めた、『梁塵祕抄』と題する書に、その披講の例歌として、「きみか代は、千世にやちよに、……」と見えるところからしても、ほぼ疑いあるまい。（上記『神楽歌の源流』）

ところが、「耶馬壹國」論者の古田武彦氏は『奪われた国歌「君が代」』（二〇〇八）において、歌詞の變遷に言及せず、現在の「山誉め祭」に接して以下のやうに斷言されてゐます。

糸島・博多湾岸で生まれた歌は、薩摩で「賀歌」になりました。その流れが、薩摩琵琶などを媒介としつつ、『古今集』に取り入れられ、今の「国歌」に採用されたのです。

『古今和歌集』以前に薩摩琵琶があつたとは驚くべき新説で、「いはほ」の解釋もユニークです。

南九州の九州山地系の連峰や北部九州の背振山脈や高祖山連峰といつた連峰の場合、その山々の上部に「岩」が突出してゐれば、これを「いはほ（岩穂）」と稱することはできるでせう。

志賀海神社の「山ほめ祭」の「台詞」の場合、現代假名遣ひで「いわお」と書かれてゐるから、本來これが「いはほ」か、それとも「いはを（岩尾）」かは今のところ判別できません。しかし、本來の舊假名遣ひを保存する『古今和歌集』によつてみると、明白に「いはほ」なのです。（中略）

山口縣には日本最大の一大鍾乳洞群が存在してゐます。よく知られた秋芳洞です。（中略）

いづれも、數多くの「鍾乳石」や「石筍」などの「いはほ（岩穂）」を内藏してをります。（中略）

とすれば、先ほどあれほど「難解」に見えてゐた「いはほとなる」の表現は、何の無理もなく「鍾乳石」だと理解されるでせう。

「さざれ石」との關聯が今ひとつ理解できません。

「君が代」の歌詞の解釋については諸説がありますが、和歌の性質上、掛詞や押韻などの修辭法を無視できず、すぐれた和歌はたつた一つの解釋では味はひ盡せないことを痛感させられます。和歌であれ、詩であれ、日本語の特性は重層的な構成が可能な點にあります。

たとえば、和歌に「みをつくし」といふ言葉があれば、「難波なる」「難波江の」といつた修飾句があるでせう。難波は舟の通り路を示すために立てる杭「澪標（水脈つ串）」が多いことで有名だつたからです。さうして「澪標」は「身を盡し」と掛けられることが多いため、掛詞が成立しない現代かなづかひの「みおつくし」といふ表記はあり得ないのです。

もとより古代歌謠では、「今日」を「キョウ」ではなく「ケフ」と發音するため、現代かなづかひで表記することには無理があります。文政二年（一八一九）の『北邊隨筆』（富士谷御杖著）の初編三「音の存亡」にも次のやうに書かれてゐます。

いにしへ、神樂、催馬樂などをうたふが如くに、こひは子火と聞えて、こゐとはいはず、あふも、安婦ときこえて、おうとはきこえざるべし。

「わが君は」や「君が代は」の初句で知られる和歌における「いはほ」の發音は、「イハホ」であつて、「イワオ」ではないことがわかります。ところが、現代かなづかひでは「いわお」と表記するため、「みおつくし」と同じやうに掛詞が消え、和歌本來の味はひが殺がれてしまひます。

この言葉を歌ふとある風景が浮かび上がつてくるため、私は「いはほ」を「岩穗」と「巖」の掛詞ととらへてゐます。「いわお」の表記と發音では、その掛詞が打ち消されてしまふのです。そもそも歌の解釋は一人一人違つてよいわけですから、思ひ切つて私のイメージを披露してみます。

まづ、「君が代は」の和歌が敕撰和歌集にとられたり、歌披講の例歌に採用されたりしたのは、當時よく知られてゐたからと考へるのが普通でせう。「讀み人しらず」といふのも、名前を出すのが憚られたなどと深讀みしても論據を示せないので、素直に作者がわからないほど昔から歌はれてゐたと考へます。かつて倭國の祭禮などで歌はれた古歌が列島各地に廣く傳播したとなると、その運び手は遠距離を移動した人たちといふことになります。「志賀白水郎の族人たる傀儡子」はもちろんですが、私は七世紀後半から八世紀中葉にかけて編まれた日本最古の和歌集といはれる『萬葉集』に數多くの歌が收められてゐる防人に着目してゐま

す。

防人とは、天智天皇二年(六六三)の白村江(はくすきのえ)の戦ひで唐・新羅聯合軍に大敗したことを機に翌年から九州沿岸に配屬させられた防衛軍の兵士で、遠江以東の東國から徴兵した農民らで組織されてゐました。その數二、〇〇〇餘人、三年交替制といはれてゐますが、武器も食事も自前だつたため、戻れなかつた人が相當數ゐたやうです。國境の島・對馬に防人が置かれ、天智天皇六年(六六七)には淺茅(あさふ)灣南岸に金田城(かなたのき)が築かれました。

對馬能禰波　之多具毛安良南敷　可牟能禰尓　多奈婢久君
も毛乎　見都追思努波毛　(巻一四・三五一六)
ツシマノネハ　シタグモアラナフ　カムノネニ　タナビククモヲ　ミツツシヌバモ

『萬葉集』巻二十に「天平勝寶七歳(七五五)乙未二月、相替遣筑紫諸國防人等歌」と題して八十首餘りの防人の歌が竝んでゐるのは、當時兵部少輔として難波津から筑紫へと船出させる任にあたつてゐた大伴家持が、國府に命じて防人らの歌を集めさせたためです。對馬の防人たちは文末の寫眞のやうな岩の上にさざれ石を積んだヤクマの塔を見たことでせう。

對馬には獨自の天道信仰があり、かつては全島でヤクマ祭りが行はれてゐました。今も舊暦六月の初午の日に村人が石を積んでヤクマの塔を作つたり、馬供養をしたり、草競馬をしたり、夏の收穫祭との位置づけからハタクモン(畑物)を供へたりしてゐます。本來の意味は不明ですが、集落の男たちが作つた石塔の頂にカラス石と呼ぶ縱長の石を置き、御幣を挿して子供の成長や健康、長壽を祈るところに稻作・漁撈民の太陽信仰と鳥信仰を感じます。

對馬の天道信仰は彌生時代、稻作とともにもたらされたと傳へられてゐます。今われわれは稻作と漁業を區別して考へがちですが、對馬では近世まで農耕地を持つ者だけが海藻の採取權を持ち、土地を持たない漁民は藻を刈ることを許されてゐなかつたさうです。

天道信仰の據點の一つ天神多久頭魂神社の石塔は有名ですが、こうした石積みは對馬だけにあつたわけではありません。オマーンの前期青銅器時代の圓塔墓や、韓國の石塔(タプ)も石積みです。

彌生時代から天道信仰をもつ對馬でいつ頃から石積みが行はれたのか定かではありませんが、集落ごとに男たちが男子(日子)誕生の祭りで石積みをしながら健康や長壽を祈り、「君が代(だい)は千代に八千代にさざれ石のいは穗となりて

〜」と歌つたと想像するだけでこの歌の世界がひろがります。

繰り返しますが、和歌をどんなイメージで歌ふかは個人の自由です。さうして和歌においては、想像をたくましくして修辭法や重層的な解釋をきはめることが大切だと思ひます。「君」といふ言葉一つとつても、對象を限定せず、無限に存在する「人」と考へれば自然に奥行きが增すのではないでせうか。

さて、鶴が一本の稻を運んできて稻作が始まつたとの傳承がある對馬の志多留では昭和二十三年（一九四八）に上下二層を成す志多留貝塚が發見されてゐます。上層からは彌生時代前期・中期の大陸式の石ノミや石包丁が、下層からは繩文後期の鐘崎式土器、佐賀縣伊萬里產の黑曜石や貝製腕輪などが出土しました。この發見で紀元前三、二〇〇年頃までに九州沿岸部との交流が始まつてゐたことが證明されました。博多灣岸には同じ海人族が住んでをり、對馬から祭禮の歌が傳はつた可能性を否定するのは難しいでせう。その歌を、のちに九州や對馬へ派遣された防人たちが各地に傳へたのではないかと私は推測してゐます。

安曇族の歌が宮中へ入つて「神樂歌」になつたとの說は「阿知女作法」や「磯等」で證明濟みですが、歌披講に關しても、現在まで例歌として「きみがよは ちよにやちよに さざれいしの いはほとなりて こけのむすまで」が使はれてゐることから、そのはじめに安曇族の古謠を用ゐた可能性がありさうです。

歌披講とは定まつたフシにさまざまな和歌をのせて歌ふ「替へ歌」です。和歌が盛んだつた平安時代には數多くのフシがあつたさうですが、その最初期に安曇族の「君が代は」のフシが使はれたとしても不思議はありません。それに歌披講が「替へ歌」であることを考へれば、『古今和歌集』にとられた形が「わが君は」であれ、「君が代は」であれ、古來のフシにのせて歌つてゐるうちにたまたま變化したのかもしれず、さほど重大な問題とは思へません。寫本ごとに內容が異なるのはこの時代なら當り前ですし、元歌をアレンジする「本歌取」も「盜古歌（こふをとる）」と批判されつつ盛んに行はれてゐました。

『古今和歌集』卷七・賀哥の卷頭「わが君は」に續く二首にも海人の風俗が詠み込まれてゐます。

三四三　わがきみは　千代にやちよに　さゞれいしの　いはほとなりて　こけのむすまで

三四四　わたつみの　はまのまさごを　かぞへつゝ　君が

ちとせの　ありかずにせむ
三四五　しほの山　さしでのいそに　すむ千鳥　きみがみよをば　やちぞよとなく
三四六　わがよはひ　きみがやちよに　とりそへて　とゞめをきてば　思ひでにせよ

次の、光孝天皇の和歌は「しほの山」「わがよはひ」と同じく「わがきみは」を本歌取りしてゐます。

光孝帝仁和御時 賀僧正遍照七十之壽所製御歌
三四七　かくしつ　とにもかくにも　ながらへて　君がやちよに　あふよしも哉

國歌「君が代」の音を考へる
―壹越調律旋

國歌「君が代」は壹越調律旋で作曲されてゐると言はれます。では、壹越調律旋とはどんな音樂なのでせうか。雅樂に唐樂の六調子といふものがあり、律旋は黄鐘調、平調、盤渉調、呂旋は雙調、壹越調、太食調とされてゐます。すると壹越調は呂旋です。なのに、なぜ律旋になつたのでせうか。

私は、壹越調律旋が「國樂」になつた理由を、唐樂の六調子にない音律だつたからと考へてゐます。

渡來人によつてもたらされた樂器や音樂や舞、さらに中國の音樂理論に觸れた日本人は「國樂」の重要性を知ります。古代中國では王朝が交代する度に式樂の音律を換へ、樂師を抹殺してゐました。國政改革の證として先づ總ての度量衡の基準を改制してゐたのです。それで天智天皇九年（六七〇）頃、日本最古の弦樂器で『梁塵祕抄口傳集』（一一八〇年前後の作）に「和國の器にして日本の音曲の頭としるべし」とまで書かれた和琴を六絃に統一したのでせう。

ちなみに、漢の宮廷式樂は、邸内の中心に祖廟を置いて常時祖靈に對する祭祀を怠らず、宮所での儀式を禮節の第一としてゐました。元旦の祖廟奏樂を年間行事の始まりとし、五音七聲の主音である「宮」を月ごとに一段（半音）づつ上げて十二月まで續けるにあたり、代々の支配者たちが民族の開祖と仰いでゐた黄帝の頭字を付した「黄鐘」を十二律の第一音律としたさうです。日本はその主音を「壹越」と定めたのでせう。

「樂」は「禮樂」といふ風に「禮」と竝び稱されるほど重要なもので、神や祖靈と交信する方法でもあり、國家を治

める方法にもなると考へられてゐました。現在、中國の五經は唐代の『周易』『尚書』『毛詩』『禮記』『春秋左氏傳』とされてゐますが、古くは『詩經』『書經』『禮記』『樂經』『易經』『春秋』の六經でした。『樂經』は「樂」の威力を恐れた秦の始皇帝の焚書坑儒によつて失はれたとされてゐます。

『春秋左氏傳』から春秋時代（紀元前五六三年）の故事を引いてみませう。

殷の時代、大干魃が續いた時に國王が桑林といふ土地で雨乞ひの儀式を行なつたところ雨が降つたので、この時に使つた歌や舞踊を「桑林の舞」と名づけて國樂としました。殷が滅びたあと「桑林の舞」を繼承した宋の國王が、敵對する晉の國王と和睦の會合をもつた時、晉侯をもてなす宴で「桑林の舞」を披露すると、樂師らを率いて旗手が登場した瞬間に王が異變を訴へて別室に下がり、歸途に死に至るほどの病を得たさうです。この「桑林の舞」の故事でもわかるやうに、當時「樂」は兵器に匹敵するほど重視されてゐました。たとえ國が滅びても、民族の祕傳ともいへる「樂」や舞や文樣を傳承してゐればその國は必ず再興できると信じられてゐたのです。それゆゑ征服者は前王朝の樂師を抹殺してまで「樂」を絶やしたのでせう。「國樂」は同族には吉兆をもたらすけれど他民族には凶兆を及ぼすとの考へ方は古代中國にも古代ギリシャにもありました。

しかし日本列島に住んでゐた人々は相手を全滅させる途を選ばず、他民族が渡來すれば共存し、神話にも見られるやうに婚姻によつて「和」してきました。これが日本の「國樂」たる壹越調□律旋が現在の國歌に至るまで命脈を保ち得た所以でせう。

その壹越調律旋の和琴の音を西洋の階名に置き換へると、主音の壹越（レに近い音）をオクターヴでとるレ～レと、レ～ソ、ミ～ラ、ラ～レの完全四度音程、レ～ラ、ミ～シ、ソ～レの完全五度音程で構成されてゐます。さうして、レ・ミ・ソ・ラ・シ・レの五音音階が、手前から順にレ・ラ・レ・シ・ソ・ミと竝べます。

このやうに、二：一を一オクターヴ、四：三を完全四度、三：二を完全五度として音律を決める方法は、すでに紀元前五、六世紀頃から古代ギリシャや古代中國などで行はれてゐました。さうして繩文時代の日本にも、完全四度音程を出す石笛（いはぶえ）がありました。

平成二十年（二〇〇八）、轟貝塚（熊本縣宇土市）から約六、〇〇〇年前の繩文時代前期に形成された長さ六センチ、幅二・九センチ、厚さ一・六センチ、重さ四四グラムの黑

色石灰岩の石笛が出土し、人が加工したとの見解が出されました。偶然穴があいてゐた石を利用した場合は別として、繩文時代の遺跡から發見された幾つもの石笛や土笛の中に完全四度音程を出すものがあるとしたら、古代ギリシャのピタゴラス音律、古代中國の三分損益法と同じく、日本人も四度音程、五度音程を算出する方法を知つてゐたことになります。

さうして古代中國の『太簇均羽調』『管絃音義』などに學んだ日本人は、壹越調律旋の五音に、東西南北と中央、五行思想の五色、春夏秋冬と土用を、理論上完璧な形で整へました。

壹越（レ）＝中央、黄、土用
平調（ミ）＝西、白、秋
雙調（ソ）＝東、青、春
黄鐘（ラ）＝南、朱、夏
盤渉（シ）＝北、黑、冬

明治十三年に海軍省が宮内省に作曲を依頼した「君が代」を、林廣守が壹越調律旋として撰定したのは、一つの王朝が連綿と續いてゐることの證明だつたのです。

（あゐかは ゆみ　ソプラノ歌手　學術「音樂」博士）

ヤクマの塔（一七頁參照）

福田恆存先生追懷

谷田貝常夫

颱風接近といふいかにも劇的要素を含んだ天候の中、九月三十日に「福田恆存とその時代」といふ講演會が新宿で開かれた。ここ二年ほどの間に福田恆存論が何册か上梓されたが、いづれも五十歳代以下の若手による本格的な評論であり、評判にもなつた、パネルディスカッションに登場したのがそのやうな人達であつた。親のことゆゑにあまり父を語りたがらなかつた御子息の福田逸（はやる）明治大學教授、歴史的假名遣で物を書いてゐる遠藤浩一拓殖大大學院教授、葬儀に流された曲がベートーベンのチェロソナタ三番だつたことに意義を認めた新保祐司都留文化大教授、福田恆存の文章に出會つたのは歿後だつたといふ中島岳志北海道大大學院准教授である。その上、會が終つたあとも座席にゐた川久保剛麗澤大准教授、濱崎洋介東工大講師が皆に紹介されたが、この三十代の二人は、最近福田恆存の評傳、評論を上梓したばかりだ。

二十歳前に「自分に對する一切のレッテルを拒否する樣に生きたい」、傲岸、不遜な言葉だがとの斷り書付きの發言をしたことのある福田恆存だつたが、その後の活動範圍の多樣なことから幾つものレッテルが貼られた。畏友中村保男は「恆存といふ多面體」と表現したが、このディスカッションの時の話の中で際立つたのが、中島の發言「宗教的哲學者」といふレッテルである。その詳しい論據は聞きそびれたがが、筆者が年來考へてきたところに近い。

＊文學が宗教だといふのは、人々がめいめいに勝手なまじなひを唱へて救はれるといふことでせう。それが宗教といふのはをかしい。が、それは宗教ではないにしても、とにかく日本人は、そのまじなひを唱へる「氣分的信仰」によつて救はれてきたことは事實であります。・・〈源氏物語『須磨』〉・・これは聲明（しやうみやう）につながるものだ。それはお經にも謠曲にも通じる。（個人主義からの逃避）

＊自分にとつて一番どうにもならぬものは自分であり、人間にとつて一番どうにもならぬものは人間である。前者の考へ方は道德に、後者の考へ方は宗教に道を通じてゐる。（眞の自由について）

福田先生は常日頃、昭和天皇に親しみをもつてゐた。園遊會に招かれてお言葉をかけられ、「時流に逆つて、憎まれ役ばかり演じてゐます」と應へたことを嬉しさうに語つてゐ

る。その上で公には「天皇制」には反對ですと明言してきた。國民感情のうちでは天皇は依然として神である、日本人は人間が神になることを少しもをかしいとは思つてゐないからといふ前提付きでのことではある。

＊私と同じ人間を絶對なるものとして認めることができないからです。だからといつて、天皇を絶對視する〈愚衆〉を、私は單純に輕蔑しきれません。少くとも、絶對主義を否定し、相對の世界だけで事足れりとしてゐる唯物的な知識階級よりは、たとへ相對の世界にでも絶對的なものを求めようとしてゐる〈愚衆〉の方が信頼できます。

（西歐精神について）

といふ論理からである。ローマ法皇は間違ひを犯してもよい、その上に絶對者がゐるから。しかし天皇を絶對者にすると、天皇が間違ひをしたときに救ひやうがないとも言つてゐて、考へ様によると天皇を憐れに思ふ同情からの發言ともいへよう。

讀書會の折、「抽象と感情移入」のヴォーリンガーを讀んでも、二人稱小説のビュトールを讀んでも福田さんの評は、どうしても絶對者を欲しがつてゐるねとなり、文章のどこにそれがと、われわれには理解を越える話だつた。餘談にわたるが、福田恆存の文章を讀取る力は抜群で、眼光紙背に徹してゐたことは誰も認めるところであらう。當用憲法しかり、イザヤ・ベンダサンの文章は日本人のものと直に喝破したし、三島由紀夫『鏡子の家』が「奔馬」に進んだ頃だらうか、死の一年前にその文章を讀んで「三島は完全に狂つてしまつたね」と言はれた。まさかあのやうな形でとは想像できなかつたにせよ、何か話題になる行動に出るに違ひないことだけは筆者も心得てゐた。

＊クリスト教はけつして神祕主義ではありません。私にとつて、それは論理的に一點、非の打ちどころのないものに見えます。すくなくとも唯物史觀やマルクシズムより、論理的です。そのことは絶對神の設定についてはつきりいへます。第一に論理そのものが、彈力性と立體性とを獲得しえたのです。ギリシヤのそれのやうな、どこまでも同じ平面を這ひまはる惡循環から脱けだすことができたのです。たとへていへば、重い物を動かすのに、直接、それを押したり引いたりしないで、梃子を用ゐるやうなものです。當の物體が相對の世界であり、梃子の棒が論理です。そして支點が絶對です。この動かぬ絶對を支點として間接に用ゐたために、物が樂に動くわけです。（西歐精神について）

ギリシャでは論理を動かすのに第一原因がどうしても必要

であつたので、棒と支點が同じものになつたのであらうか。ここから福田恆存の二元論が生れる。

＊一方の極に現實否定の絶對者をおいたために、他方では、それではとても生きられないといふことで、現實肯定に居なほることができるわけです。これは絶對者と相對的現實を兩立せしめる二元論であります。絶對者を置く以上、哲學的には絶對主義でありませうが、結果としては、絶對と相對とに相渉る相對主義だといへないことはない。人間は神に否定され、神に造られたものであると同時に、神を肯定し、神を造つたものであるといふ意味において、私は西歐人の生きかたを一人二役のそれと名づけたいのです。（絶對者の役割）

三島由紀夫に、あなたは西洋と暗渠でつながつてゐると言はれても、福田恆存は殊さら反撥しなかつた。日本人の優劣を論じるより、東洋西洋にまたがる人間存在の在り方を探ることの方が大切だと考へてゐたことに間違ひはない。その中心に信仰ではない絶對志向の論理があつた。そこから生れた二元論であつたが、遠藤浩一が最初で最後に福田恆存に會つた時に耳にしたのは、「汎神論について考へてゐ」ることだつたさうだ。われわれにも最晩年に一元論の話を持出され、プロティノスを勉強したいといふことだつたが、時間がそれ以上の展開を許さなかつたことが惜しまれてならない。

東大の卒業論文がD．H．ロレンスの倫理問題だつたことは知られてゐるが、筆者がウィリアム・ブレイクを話題にしたとき、先生が、最初はブレイクを卒論にするつもりだつたのだがと言はれ、事の意外にそれ以上の話は途切れてしまつたのが心殘りだ。ブレイクでは現世と相ひ亙るところが薄過ぎだつたのではなかつたらうか。白樺派ではなくチェスタートンが賞讃してゐたことも理由の一つだつたかも知れない。なるほど、割にブレイクの詩の斷片が引用される理由がわかつた氣がする。醉餘のお笑ひ草に作られた詩、「すばる」（思ひつくままに　その四）にあるフレイズ「一瞬のうちに、そして／一粒の砂のうちに／永遠が宿る／・・・」はブレイクのものだ。晦澁なメタファーが鏤められてゐるブレイク詩は「天國と地獄の結婚」など一元論に收斂する感覺があり、晩年になつてそれが頭の中に蘇つて來はしなかつたらうか。

ある日、福田先生から「あのトランプのクイズ、解けましたよ」と言はれて仰天したことがある。一年以上も前に出したクイズであつたし、聞きかじりで出したクイズがどん

な仕掛のものだつたか、物忘れ抜群のこちらのあたまからはすつぽりと抜けてゐたものだ。あれほど多くの仕事をなし遂げながら、こんな些事にまで頭を使はれてゐたことが駭きだつたのである。いつもアイディアが浮んできて頭の休むひまがないとも、茫としてゐるときが一番樂しいとも言はれて、その茫としてゐる間もトランプ・クイズなどのことを考へてをられたのだらう。頭の體操をしてゐるんだといふ言葉も聞かれ、そのやうな成果の一つが『批評家の手帳』ではあるまいか。中村保男の言を引用すると本書は「多くの獨創的な質問を問ひ掛けたり答へたりしながら言葉といふ迷路を歩む福田氏の、明晰なる知的運動なのである。」言換へると、對話形式の思考スキームであり、遠藤浩一が福田恆存のダイアローグ的であるのに對して三島由紀夫の文章はモノローグ的だと指摘してゐるところは納得される。この對話といふところから聯想されるのがプラトンであり、さらには『ミリンダ王の問ひ』である。福田先生もどこかで引用されてゐるが、唯名論的問答で存在の在り方の理解を進めるメナンドロス（ミリンダ）王と佛教の高僧ナーガセーナとの對話は、その思考のメカニズムは互にかなり似てをり、さらには唯識論へとつながつていつたやうに思へてならない。

＊ 私たちが言葉を與へてゐるもの、言葉を與へて名づけうるもの、それらはすべて存在しないものである。存在するのは、ただ言葉だけなのだ。名づけられて言葉をもつてゐるもの、それらの事物はすべて言葉によつて初めて存在せしめられたものである。それなら、言葉の助けを借りずに存在しうるものはないのだらうか。それは在る。在るはずだ。それが在ると信じてゐればこそ、私たちはあらゆる事物が言葉の助けなしには存在しえないことを知つたのである。言葉の助けを借りずに存在しうるものは確かにある。だが、それはただ單に言葉の助けを必要としないのみか、言葉に助けを求めてはならぬものなのである。それは名づけられぬものであり、名づけてはならぬものなのである。それは「存在」そのものである。

（批評家の手帳　五十七）

この書には、「言葉で言ひ表せることと、言葉では言ひ表せぬことと、その二つの戸口の間をまるでお百度でも踏むやうにして、ああでもない、かうでもないと呟きながら、往き來を重ね、ただその快を貪るだけに終つてしまつた。」（覺書五）の述懷がある。對話篇と言ひ得る所以だ。その言葉では言ひ表せないのが存在だといふことも、往き來する思考

の體操の揚げ句に辿り着いたものである。ハイデッガーからの引用も多いが、そこから聯想されるのは長谷川三千子元埼玉大教授の紹介する和辻哲郎だ（『日本語の哲學へ』）。和辻は『存在と時間』に大いに傾倒し影響を受けたのだが、ハイデッガーの「言葉の本質は存在の眞理の棲家だ」、あるいは「人間は言葉の杜に棲む」と言つた「言葉」を思考對象とした際には、ダーザインとかアレーテイアといつたことばをあたかも普遍言語であるかのやうに扱つて、「言語の民族的相違」までは配慮しなかつたことに不滿をもつたと言ふ。その點に關して福田恆存の次の言表は、哲學を專門としてゐないからこそのもので、それだけに新鮮に感じられる。

＊言葉といふものは實在にたいして飜譯の關係にしかないといふことだ。そしてまた、あらゆる言葉が實在を迂回して間接に指示する比喩でしかない。（批評家の手帖二十四）

和辻哲郎は、あるとは何かといふことに關し、「この問ひを形作る日本語自身がすでに重大な四つの問題を含んでゐる」として、「こと」「いふこと」「ある」を取上げてゐるさうだ。長谷川三千子はそこから一歩を進めるために「もの」と「こと」といふ言葉をあらためて問ひ直し、國語學者や漢字學者などの諸論文を踏へ、さらには萬葉集などの和歌を引用した上で詳細に論じてゐる。ここではそれに對應する福田恆存の言葉をあらためて取上げてみたい。

＊竹の棒と鳥の羽根と鐵の鏃との三つの部分の結合體である矢は一個の事物である。同時に、その結合體である矢を、弓といふ別の部分の結合體につがへ、人間といふもう一つ別の部分の結合體が射て放つといふ行爲も、またそれぞれ矢、弓、人間といふ三つの部分の結合體を示す一個の事物である。なるほど、そこには射るといふ動的な行爲が介在する。が、矢も弓もその中には製作といふ行爲が含まれてゐる。それは製作といふ行爲の結果であり、製品である。製作といふ行爲とその結果の製品とを、また射るといふ行爲とその道具の製品とを、言ひかへれば、「こと」と「もの」とを混同するのは、ギリシアの詭辯家の過ちを犯すことではないか、あるいはその詐術に倣ふことではないか。さうかもしれないが、彼等ソフィストたちの時代は、結局はその兩者が同列の對象であることを最初に豫知した時代ではなかつたか。もつともニーチェによれば、その曙は既に、おそらくは人間が現實を認識しはじめた最初の頃、すなはち古代ギリシア七

賢人の時代に始るといふ。さうも言へよう、「もの」について考へるといふことは、「もの」から「こと」への轉化を必然ならしめるから。（批評家の手帖　三十五）

「ぼくは〈～といふこと〉といふ題名が好きなんだ」と言はれたことがある。「理解といふこと」「告白といふこと」等確かに多いし、「永井さんのこと」「坂口さんのこと」といつた題もある。言葉は事物を差し示すものであると同時に事物そのものであるともあつて、かうなると副題の「言葉の機能に關する文學的考察」は、「言葉による文學の哲學的考察」と言ふべきだらう。「もの」「こと」に關する考察にも怠りは無い。

何かの所用があつて福田先生が常宿としてゐた銀座東急ホテルに伺つたことがある。さして廣くない部屋の壁に、疊半疊以上もある額が立てかけてあつた。印刷ものではあつたがレオナルド・ダ・ヴィンチの聖母像のデッサンだつた。絶讃されたうへで、この世を超えたものを讀ませない繪は見るまでもない、歐米の繪畫もルネッサンスで終つたね、との持論を展開された。その上で、これからこのホテルで小林秀雄と全學連の連中と會ふのだと笑顔で言はれたのに愕然とした。「あまりに若い内から人を支配することを覺えるのはよくないね」との言葉も。ダ・ヴィンチと全學連との落差もさることながら、暴力をもつて市民を震撼させてゐたあの若者達をどう説得しようといふのか。ペンのみに據らない國を思ふ行動力に感歎させられたのである。寔に多面的な活躍ではないか。

ダイアモンドにブリリアンカットと呼ばれるものがある。一つの個體ではあるが、反射率や屈折率を調べ數學的に計算し盡した上で、最も美しく輝くやうなカットをした五十八面體のダイアモンドである。「恆存といふ多面體」はまさにそれに似て、人間の本質を論理を通して多面的に語つて、そのどの面もブリリアントに輝いてゐるといへるだらう。

（やたがひつねを　國語問題協議會事務局長）

美しい日本語の再發見（その二）

大喜多俊一

三

前回は日本語の單語が、言葉として印象的に使はれてゐる場合を、美しい日本語の例として擧げてみた。

が、これら四つ五つの語は敢へて季節に關係のない語を擧げたものであつて、實は、日本語の美しい單語としては、心の箪笥に整理され、しまひこんではあるが、すぐに出してきて使ふことのできる語の集團があるのである。それは日本の季節を表す語、つまり日本の四季の美しさそのものを語に表したもので、これまた多くの人々の愛好してやまない語の群れである。端的に言へばそれらは俳句の季語といはれる語句で、俳句を作る作らないにかかはらず、馴染みの深い語ばかりである。日本人は豐かな自然に惠まれてゐる喜びを體驗して、それを稱へる語をたくさん生み出してきた。これには多くの例を容易に擧げることができる。「さみどり」とか「淡雪」とか「風花」とか、あるひは「陽炎」「紫陽花」など季節感を表す語のほかに、地名や物語の題名にも趣深いものがある。『源氏物語』を繰れば、宇治十帖には「橋姫」「早蕨」「浮舟」「夢の浮橋」などロマンティックな語も多い。

そんな中でも、自然の現象を表す語として特に細かい言ひ分けを持つてゐる代表は「雨」と「月」ではないかと考へられる。次のやうなさまざまな趣致あふれる表現があることを復習してみたい。

「雨」では次のやうな大和言葉を擧げることができる。

朝雨・大雨・小糠雨・通り雨・長雨・涙雨・俄雨。花の雨・肘笠雨・日照り雨・遣らずの雨・惠みの雨・若葉雨・秋雨・小雨・春雨・村雨・氷雨などなど

「月」の大和言葉は次の通りである。

幾の月・雨夜の月・有明の月・十六夜の月・居待月・卯月。梅見月・閏月・朧月・風待月・神在月・神無月・菊月・皐月・霜月・黄昏月・立待月・長月・流れ月・夏越月・名殘月・寢待月。臥待月・文月・星月・眉月・三日月・水無月・睦月・望月・紅葉月・夕月・雪待月・弓張月・夢見月などなど

日本人は自然を稱へる詩歌をたくさん作つてきた。例は枚擧にいとまがない。その中で、既に擧げた『故郷』と竝び稱される、文部省唱歌の名歌「朧月夜」をここで取り上げてみたい。これには「朧月夜」といふ題名に加へて、「菜の花」「かすみ」「春風」「かはづ」といつた春の季語が幾つ

も使はれてをり、また八語六語の言葉の調子がよく、今もつて愛好されてゐる歌である。全文を讀み返してみる。

（一）

菜の花畠に、入り日薄れ、
見渡す山の端霞深し。
春風そよ吹く、空を見れば、
夕月かかりて匂ひ淡し。

（二）

里わの火影も、森の色も、
田中の小路をたどる人も
蛙の鳴くねも、鐘の音も、
さながら霞める朧月夜。

この歌は日本の田園の春の夕べの情景を歌つた詩として、あへて言へば最高の作品である。まだほの明るい入り日の頃からやがて暮色があたりを包んでいく時間の推移、そこに漂ふのは幽玄の餘情といふのか耽美の風致と言へばよいのか、評論家の森本哲郎氏は、その懐かしくも美しいメロディを含めて、次のやうに形容してをられる。

＊なんという優しい風景でしょうか。「春風そよ吹く空を見れば」、そこに夕月がかかっており、酸郁たる香りが淡く漂っている。やがて入り日がすつかり落ちてしまうとようやく月がおぼろに光りはじめ、そのおぼろの月の光の中で、「里わの火影も、森の色も、田中の小路をたどる人も、蛙のなくねも、鐘の音も、さながら霞める」ように眺められるというのです。（中略）そしてこの歌が何十年もの間、歌いつづけられてきたことを考えると、これは日本人にとっては、永遠に郷愁をさそう「魂の風景」と言つてもいいでしょう。」（『ことばへの旅』4）

「魂の風景」とはまことにいみじき形容である。美しい日本の景色を背景にしてできたこの歌は、まさに美しい日本語の世界である。その祕密の一つは、歌詞の言葉がすべて柔らかい本來の大和言葉によつてゐることである。このことは、先に擧げた『故郷』も全く同じであるばかりか、これまでに美しい日本語の例として示してきた詩や短歌や俳句についても一様に言へることである。

ここでちよつと中間的な場ではあるが、これまで語つてきた事柄を顧みて、いはゆる美しい日本語といふ言葉あるいは表現の、條件といふか、その姿が、いくらか明らかに現れてきたのではないかと考へられる。そこで、それらを少し整理してみると、次のやうなことが言へるのではないかと思はれる。

すなはち、美しい日本語の姿は、

・懷かしさを呼び起す言葉
・しみじみとした思ひを抱かせる表現
・心のこもつた表現
・大好きな、あるいはとても愛してゐる對象が身近に感じられる表現
・美しい日本の風景や風物を表す言葉
・人々に受け入れられやすい、本來の大和言葉
・視覺にも美しい文字で表された言葉

といつた要素を備へてゐることが、まづは大切な要件ではないか、と考へるところである。

四

ここで、以上のやうな條件を見つめながら、さらにまた日本語が美しく驅使されてゐると感じられるのはどんな場合なのだらうかと考へを進めていく。

論の初めに、言葉はまづは單語として、その音あるひは文字が體系の中にしまひ込まれてゐると述べた。それを復習する中で、右に述べたやうな、心に響く印象的な單語でなくても、表現の仕方によつては、これこそ美しい日本語だと考へられる場合があるといふことについても例を擧げてみたい。單語を引き出して行ふ「表現といふ行爲」は、まさしくTPOによつてこそ表に出されるからである。

例へば、ここに普通に用ゐられるスポーツ用語がある。ラグビーの試合で聞かれるハーフタイムとノーサイドといふ用語。この語をこんなふうに使つた人がゐたのを覺えてをられるか。

＊ おい、奥、今ごろ横になって何してんだ。まだハーフタイムだぞ。後半もいっしょにやろうつて言ってたじゃないか…。ああ、もうノーサイドか…。

平成十五年十一月、イラクで殉死した、外務省の奥大使の葬儀の席で、かつてともにラグビー競技を行つたことのある同輩の坂本眞一さんが述べた弔辭の一節である。私はこれを聞いて深い感動を覺えたのである。これはまさに美しい日本語だと感じた次第であつた。

ハーフタイムが卽ノーサイドになる悲劇、それを涙とともに述べた坂本さんはとても優しい心と思ひやりの言葉をもつて友人の急死を悼んだのであつた。その日本人の心くばりを慮り、あへて一首を添へておきたい。

＊さだめなきハーフタイムの聲ふるへ
異鄕に殉ぜし影の寄り來る

さらにまたの例を擧げる。

癌といふのはだれもが避けたい病氣である。はからずも

全く豫期せぬままにこの病魔に冒された隨筆家であり俳人であつた江國滋さんは闘病句を書きつづけ、死後に『癌め』といふ題の句集が出版された。その中から初期の二句と臨終の一句を引く。

＊寒の明け告知の一語「高見順」
　殘寒やこの俺がこの俺が癌
　おい癌め酌みかはさうぜ秋の酒

江國さんには印象深い句がたくさんある。例へば、「物干し竿」といふ、詩的でも何でもない譜句を使つて、

＊五月雨に濡れて物干しざを暮るゝ

といふ句を作つてゐる。阪神タイガース、特に藤村富美男選手の熱烈なファンだつた氏は、ミスタータイガースの逝去を悼んで、あふれる思ひを披瀝してゐる。また「子供の日」といふ季語を使つては

＊孫の顔つひに無縁か子供の日

といふのがある。死期を豫期して、孫がほしかつた心情がよく表れてゐる、切ない一句である。

美しい日本語に關はつて、俳句の引用がつづいてゐるが、あと二例を擧げておく。季語にしては珍しく、男女の機微をこんな風に表すのも美しい日本語の變化形だと思はれる。その季語は「竹夫人（婦人）」と「姫はじめ」で、句は、

＊抱籠や一年振りの仲直り　小西來山
　天にあらば比翼の籠や竹婦人　與謝蕪村
　有明の月照らしけり竹婦人　尾崎紅葉
　或時は心悲しうする竹婦人　小澤碧童
＊姫はじめなき寂聽の亂れ籠　鷹羽狩行・江國滋合作

これらの句は古風な中に艶な情緒を含んだ語をたつぷり用ゐてゐて、美しいといふよりもなかなかおもしろいと思はれる。

五

平成十三年秋、これぞ待望してゐた本だといふやうに、爆發的に賣れた一冊の本があつた。著者は明治大學の齋藤孝助教授（當時）で『聲に出して讀みたい日本語』といふもので、三か月間で百萬部も賣れたと言はれる。その後續編も出て、トータルで何冊出たかわからないほど多くの購買者を得た。この本には確かに、趣のある、著名な文章が多く收錄されてをり、大部分は美しい日本語の響きをもつた文章であり、購買者がそんな文章を積極的に聲に出して讀まれることを著者とともに期待するところである。

ところで、實は、私もほぼ同じやうな發想を夙にもつてをり、『學習の小道』といふ著書の中で、好みの日本語の文章を取り上げ、說明を施して、朗讀と暗唱をすすめたこと

がある。その中の「暗唱のすすめ」の項目では、次のやうな詩歌・文章を取り上げてみた。

詩歌の例は次の作品である。

・北原白秋の『落葉松』
・島崎藤村の『千曲川旅情の歌』
・高村光太郎の『雨にうたるるカテドラル』
・萬葉集卷二　柿本人麻呂の長歌「石見の海…」
・「新古今集」卷四　三夕の歌

文章の例は次のやうな作品の書き出しの部分をすすめる。

・永井龍男の『胡桃割り』
・大久保康雄譯の『風と共に去りぬ』（原作／M・ミッチェル）
・尋常小学國語讀本六年生用『奈良』（國定國語教科書第三期）
・東山魁夷の『日本の美を求めて』中の「風景」
・壺井榮の『二十四の瞳』
・古典では『古今和歌集』の假名序、『伊勢物語』『源氏物語』『平家物語』『奥の細道』など。右いづれも長い文章は一部（書き出しがよい）。

これらの文章を音讀（朗誦）し、暗唱できるやうになれば、美しいと言はれる日本語の姿・形が、理窟ではなくて自然に體得できるやうになるものと信ずるものである。

六

これまで、美しい日本語の姿・形といふことについて、いろいろな例を用ゐて説明してきた。その考への背景といふか、あるひは基盤と言つてよいのか、それは一部はスイスの言語學看フェルディナン・ド・ソシュールの言語學の理論に據つてゐるところがある。最初に、私は、薀蓄の簞笥などといふ表現で譬へたのは、實は、ソシュールの考へ方を勝手な解釋をして、あたらずといへども遠からずといふ論法に持ち込んで説明をすすめたところである。

ソシュールは近代言語學の父といはれ、言語一般と諸言語とについての體系的な研究を再組織し、二十世紀の言語學の功績を可能にした人物であり、理論は高度なものであつて、ここでは逐一の紹介をする場合ではない。ただ理論の中で、ラングとパロールといふ概念の對立といふことを述べた點については言及しておかなければならないポイントだといへよう。

これは、言語體系とその現實の顯れとの區別のことである。ソシュールは言語の體系、形式の體系としての言語をラングと呼び、これに對して言語によつて可能とされる現實の發話はパロールと呼んだ。ラングは、個人がある言語

を習得するとき體得するものであり、形式の集合ないしは社會に屬する話し手たちのうちに貯藏された財寶であり、各人の腦のうちに、陰在的に存する文法體系であると解釋した。それに對して、パロールは言語の逐行的側面であり、話し手がその個人的思想を表現する意圖をもつてラングの法典を利用する際の結合だと說明する。この理論にはのちに嚴しい批判を生む考へ方とはなつたが、一つの特色ある理論であつた。

實は、私はソシュールの考へ方のラングといふのを、すでに述べたやうに蘊蓄の簞笥といふ表現によつて解釋し、紹介しようとしたものである。と同時にパロールとしての、美しい日本語の姿を求め紹介してきたものである、と解釋していただければよいかと考へてゐるところである。

七

さて、ここで私は、このパロールの考へ方を應用發展させ、言語表現の世界といふのは、實は、形容の世界、更に言へば情容表現の世界ではないかといふことに思ひ至つたのである。それは特に今回のテーマである「美しい日本語の再發見」といふことになると、美しい表現はまさに情容表現といふ形容の世界に求めることができるのではないかと考へるのである。これまでに擧げてきた表現の例は、比較的短い文章ながら、より顯著な場合であると言へるのではないか、と考へるのである。

そこで、今からは、少し、長めの文章を、美しい日本語の例として擧げ、その表現全體が形容の表現の世界だといふことを感じてもらひたいと思ふのである。文章にはもちろん名詞も動詞も使はれてゐる。が、ここに擧げた文章は一語の形容詞で表はされてゐるわけではないが、まさに全體が形容の世界だと言へるのではないかと考へてみるのである。

著名な文章の例を引いてみる。

＊木曾路はすべて山の中である。あるところは岨つたひに行く崖の道であり、あるところは數十間の深さに臨む木曾川の岸であり、あるところは山の尾をめぐる谷の入り口である。「筋の街道はこの深い森林地帶を貫いてゐた。

（島崎藤村『夜明け前』書き出し）

＊國境の長いトンネルを抜けると雪國であつた。夜の底が白くなつた。信號所に汽車が止まつた。向側の座席から娘が立つて來て、島村の前のガラス窓を落した。雪の冷氣が流れこんだ。

（川端康成『雪國』書き出し）

＊山路を登りながら、かう考へた。知に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。兎角に人の世は住みにくい。

（夏目漱石『草枕』書き出し）

＊われわれはひくい聲で靜かに合唱しました。潮騒の音が船をつつんでいます。波は飛沫をあげてくだけて、その底の方から、うたにあわせる竪琴の音が上ってくるかと思われました。船は毎日ゆっくり進みました。先へー。先へー。そして、われわれははやく日本が見えないかと、朝に、夕に、ゆくての雲の中をじっと見つめました。

（竹山道雄『ビルマの竪琴』最後の文）

＊來し方より　今の世までも絶えせぬものは
　戀といへる曲者　げに戀は曲者　曲者かな
身はさらさらさらさら　さらさらさら
　さらに戀こそ寢られぬ

（歌謠『閑吟集』中）

＊西行の和歌における、宗祇の連歌における、雪舟の絵における、利休が茶における、その貫通するものは一なり。

（松尾芭蕉『笈の小文』巻頭文の一節）

右のやうな例をいくつも擧げてくると、パロールといふのは、まさに形容の世界であるといふことがよくわかるのではないかと考へるところである。有名な、宮澤賢治の『雨ニモマケズ』などはまるつぽが情容の世界であると言へさうだし、論語の教へも百人一首の歌もみな形容の世界である、と言へないであらうか。

八

以上、いろいろな例を擧げて述べつつも、このあたりでまとめに入れば、「美しい日本語」といふのは、先に中間で示した内容を基礎にして、それに加へて、人が場面に慮じて、引き出しを探りながら、どんな適切な表現活勤ができるか、といふことにかかつてゐると言つてもよいのではないかと思はれる。それは繰り返して言へば、しつかりしたラングが、いかにTPOにかなつたパロールになりうるかといふことである。それは言葉の表現によつていかに形容の世界をうまく形づくつていくことができるか、といふ問題である。

その説明を補ふためにこんな例を擧げてみよう。人と人との關はりの中で、應答があまりうまくない人は、形容詞、あるひは形容（修飾）の語句がうまく使へない人であるといふ、簡明なケースである。そんな場合は、人に誤解を與へたり、人を不愉快にしたりするわけである。これに對極的

なパロール（その場の表現）が、美しい言葉と言へるのではないかと考へるのである、人はその言語活動（耳または目に達した刺戟）を直觀的に美しいとか不愉快だとか感じるものである。これまで、日本語の美しいと思はれるほうの例をいくつか擧げてきたところである。

最後に、最初に擧げた單語「ありがたう」と、さらにもう一語「さやうなら」といふ語を加へて、それらが美しく交はされた場面を紹介して終りたいと思ふ。

「ありがたう」といふ言葉が、大阪御堂筋で何度も何度も雙方で發せられ、その場面に遭遇して、これはまことに美しい言葉の交換だとつくづく感じ入つた機會があつた。平成十五年十一月三日のこと、激しい降雨の中、「ホシノー、ありがたう。」―「皆さん、ありがたう。」の應酬であつた。それは待ちに待つた喜びの日の心からのエールの交換であつた。この場面に臨んで思はず拙句が口を突いて出る。

＊沸く街を秋雨沛然と聲かすむ

といふ句である。傘をたたく雨の音に「ありがたう。」の聲がかすんでとても美しく響いたことだつた。阪神タイガース優勝パレードの日のことであつた。

今一つは「さやうなら」で、飜譯小說の中の一場面を想起してみる。譯は立派な日本語であるから、日本語の美しい例である。それはイギリスのパブリックスクールを舞臺にした『チップス先生さようなら』の最後の場面で、チップス先生が、新しく出會つた少年を玄關まで送つた時に、少年が「チップス先生、さようなら…」と、調子の高い聲でいふ場面である。その翌日、チップス先生は永遠の眠りにつくといふ筋書きの中でのことで、最後の場面の書きぶりがとても感動的なので、これはまさに人の心を打つ決め手になると考へた次第である。みごとな「さよなら物語」だと言へよう。『チップス先生さようなら』は、忘れられがちな優しい心を蘇へらせる美しい少年の物語である。

以上「さやうなら」のパロールの例をもつて、今回の「美しい日本語の再發見」の論といたしたい。美しい日本語とはいかがな姿か、その答へが出たのかどうか、判斷は任せたいものである。

（おほきた しゆんいち　元・京都市教育委員會課長）

縦書きの意識と感覚（その四）

若井勳夫

中井久夫氏の論

前稿で中井久夫氏（神戸大學名譽教授、精神醫學）の縦書き論を引用した。それは横書きでワープロを打つと遺漏があり、文の建築性が展望しにくく、内言は縦書きが適してゐるといふものであつた。そこで、縦書きに關する拙稿を中井氏にお送りしたところ、懇切な返事をいただいた。ここに貴重な資料として記録しておく（平成二十二年五月二十二日付）。

横書きの文字はいちど縦に直してやらないと推敲が十分にできないよ、と若い人に申しております。ただ、科学論文の多くは横書きたらざるを得ず、私も一度縦にしてからまた横に戻しております。…

横書きの眼の動きは、ストンストンと沢庵を縦切りにしたような「包丁讀み」になつているそうでございます。…

詩の朗読をきいていますと、フランス語より日本語が美しいのですが、これは、母音を同程度の強さで発音するフランス人の今のあり方が抑揚のないものになつているからでございましょう。…日本語の場合、横書きの文章は美しく読み上げにくいように思われます。

長年の實踐に基づいて、本質を衝いた指摘である。縦書きによつて内面を深く、先を展望して考へて書くことができること、横書きはばらばらに切れて、讀みづらく、見誤りも多く、朗讀もうまくいかないことを科學者らしく冷静に諭してをられる。

東山魁夷の「道」

日本畫家、東山魁夷に「道」と題する作品がある（昭和二十五年）。兩側の草の間を眞直ぐに道が上つて行き、上方で細く右に曲つてゐる構圖である。これは青森縣八戸市の種差海岸の牧場で想を得たものである。作者は「これから歩いて行く方向の道を描きたいと思つた。「遠くの丘の上の空を少し明るくして、遠くの道がやや、右上りに画面の外へ消えているようにすると、これから歩まうとする道といふ感じが強くなってくる」と述懐する（「風景との対話」）。ここで問題は遠くの道が右に曲つてゐることで、これは基本的に實景がその通りであつた。これまでの考察では、左

に曲ることによつて、これから先の進む道が開かれる。この繪の道を右ではなく、左に向けて想像すると、明確に「これから歩いて行く方向」をより示すと思はれる。しかるに作者はなぜ右曲りのままに描いたのか。この方向感覺について他の文章でも何も記してゐない。

そこで、手許の作品集を調べると、右から左への道が六點、左から右へが五點、川や池、瀧の流れは左へが七點、右へが八點、馬が左向きが三點、右向きが一點であつた。「緑響く」は池を前にした青葉の中の白馬が左向き、「白馬の森」は右向きである。前者は清冽で新鮮な氣に滿つ。後者は神祕的、幻想的な雰圍氣で嚴かな異世界を表す。以上のことから、東山魁夷は左右の方向感覺に廣重や鐵齋ほど注意することはなかつたのではないか。「道」は畫家として認められる記念碑的な作品であり、これがもし左側に延びて行先を示してゐたのであれば、作者の方向の捉へ方、描き方に獨自の視點が加はつたのではないかと、素人の立場から勝手な想像をしてゐる.

右からの慣用句

「右に述べた通り」の「右」とは前、前條、前件、以上の意味である。これは古來、國語は縱書きが文章の基本であることによる。ここから轉じて、「右」は廣く一般的に「勿論それは右より知つた程に」「もつとも右にさやうに言つた程に」（狂言）と、以前、從來の意味になつた。「右」は空間だけでなく、時間的に過去をも指した。

このやうに、右を使つた慣用句は多樣にある。「右同斷」は前に述べたことと同じである。「右より」ははじめから、かねてからで、擴大した意味になる。「右（と）も左（と）も」「右を見ても左を見ても」「右や左」「右と言へば左」など、兩側どちらからも、すべての意になる。「右から左へ」は物事の進行を右から左へと捉へてゐることになる。「右に出る」「右に立つ」「右腕」もやはり物事は右から始る。「右の耳から左の耳」「右を立てれば左が立たぬ」「右を踏めば左が上る」なども、右から發想して始り、左に至ることが多い。

ひだりみぎにも

ただ、「うへ、左も右もとそ思しめさるるうちにも」（榮花物語、月の宴）のやうに、左から始めて、兩方、どちらもを示す表現がある。「ひだりみぎに（も）」は平安時代に慣用的に使はれた。「うしとのみひとへに物は思ほえでひだりみぎにも濡るる袖かな」（源氏、須磨）は左右を越えて、

あれやこれや、どちらにつけても、とやかくと苦しい心境を示す。「ひだりみぎに苦しく思へど」（同、空蟬）「何事も思ふままならで、ひだりみぎに安からずは、わが身も苦しくこそはあらめ」（同、若菜上）など、どちらを向いても、どれにもこれにもと、思ひ悩む狀態を表す。

この場合、なぜ、みぎひだりにもと、右から言はないのだらうか。右から左へは繪卷物の進行と同じく、自然で順調な流れである。しかし、左から右への動きは逆方向から押し返す力が加はり、何か波亂が起りさうである。このどうにも滯つて、進退が窮つた狀態が、ひだりみぎにもといふ否定的な表現になると考へられよう。

なほ、左右（さいう）、左近・右近、左大臣・右人臣などの語から左上位を說く說がある。しかし、これらは漢語の例であり、國語の發想ではない。また、漢語での左上位の觀念が我が國にそのまま當てはまるかは速斷できない。上位、下位の價値判斷ではなく、右から始つて左へ展開するといふ時間、空間の捉へ方が日本人にとつて自然であると言つてゐるのである。

左からの緊張・不安

この左からの逆行性は「一遍聖繪」で何度も確かめたが、第五卷で鎌倉入りを企てる一遍上人と制止しようとする武士の對決の場面が最も分りやすい。今までの進行は繪卷物の展開の常道として、右から左へと進んできた。しかし、この場面では一遍は左から、對して、武士は右からであり、時の順調な流れに違ひ、その不可能な結果を示す。これは、前に述べた「ひだりみぎにも」思ひ悩む樣子と合つてゐる。「みぎひだりにも」では前に進むだけである。「ひだり」を先に表すことにより、その悲劇性を印象づけることになる。

縱に扱ふと横に扱ふ

國柱會の田中智學は「日蓮上人の教義　一名妙宗大意」（明治四十年）で、佛教を知るといふ態度に二樣の別があり、それを縱と横による捉へ方の相違によつて說明してゐる。

「縱に扱ふ」とは、「その深さがかの（横の）廣さと同量であるから、素より易しいとはいへないが、一本口だけに、その人口にまごつく樣なことがない」とする。一方、「横に扱ふ」とは、「廣い開口に彷徨して、容易に入口を見出すことが出來ない。いつまでもはてしがつかなくなる。それゆゑ難しい」とする。從つて、「深さの方をとつてかかる方がまごつきのないだけ安全である。卽ち縱に扱つて一直線に佛教の極意點に達する」と述べる。つまり、縱に扱ふと、

佛教の極意點に達する」と述べる。つまり、縦に扱ふと、一點に集中して深く中心に行き着くことができるのに、横に扱ふと、左右に擴散して、把みどころがないことをいふ。佛法の究め方、探り方を縦と横による方法といふ比喩表現による説明だけでなく、縦書きと横書きの深淺とその質的な相違を的確に捉へてゐる。

縦横の扱ひ方と讀み書き

縦書きは上から下に降りていく方向であるが、横書きは左から右へ進むだけで、下には降りていかない。この縦が下に降りる感覺は縦に扱ふのと同じく、深く心に入り、沈んでいく。しかし、横は左から右への繰返しで動くのみで、横に扱ふのと同じ運動である。縦書きは一直線で、まごつくことなく、深い奥底に達する。一方、横書きは閊口が廣く、一點が定めにくく、さ迷ふばかりである。このことは書き方だけでなく、讀み方でも言へることで、縦に讀むことにより、中心線を定めて讀み進める。横に讀むのは視野が擴がつて深さに至ることが難しい。

原稿用紙は群書類從の版木、黄檗版一切經以來、一行二十字が一般的である。もし、一行が十字以内の用紙を作つて實驗したら、いくら縦書きであつても、一行がぽつぽつと途切れて、讀みにくくならう。一行が短く切れることにより、絶えず頭を上下に動かし、頭に入つて來ない。横書きを讀む時はまさにこれと同じ作業を課せられてゐるのではないか。一文字づつ上下運動を繰返し、斷續し斷切しながら、左から右に動いていく。横に扱ふことの不合理性がよりはつきりしよう。

現代假名遣の方針を英語に適用すると

柏谷嘉弘

「現代仮名遣い」の方針が、もし正しいとするなら、それは普遍性をもち、單に日本語のみに止まらず、他の言語にも通用する筈である。そこで、實驗的に英語に適用するとどうなるかを、以下に述べて、讀者の判斷に委ねたい。「現代仮名遣い」の方針は、次のやうに要約できる。

Ⅰ同じ發音は、いつも同じ假名で書く。

Ⅱ同じ假名は、いつも同じ讀み方をする。

この「假名」が、英語では「文字・綴り」に相當する。

Ⅰの方針を適用して、歴史的假名遣の「い・ゐ」「え・ゑ」「お・を」「じ・ぢ」「ず・づ」の一方だけが採用された。類似の例を英語に求めると「c」の大半が「k」か「s」に變更される。

cat come coin cleare cross cut logic classic critic lilac romantic music

などの「c」は「k」と同音なので、「k」に變る。

center certain ceremony citizen prince ancient face fancy incident nice

などの「c」は「s」と同音なので「s」に變る。また次の語などの「ch」も同音の「k」に變る。

Christ character chemistry chorus chrome

「ch」の中で〔t〕の音の、左記の語群などでは、「ch」が殘存する。

change child church rich much choose

Ⅰの方針を適用して歴史的假名遣の「おうて(負うて)、あうぎ(奥義)、あふぎ(扇)、よわう(弱う)、かはう(買はう)」は、同音なので、現代假名遣では「おう」に統一された。同樣に、左記の語群の傍線部は同音なので、同一綴りに變更される。

knot, not know, no knee, need son, sun sea, seal season, see seed, seem siege, Siegfried naval, navel won, one

また、次の例語では「i」、「igh」が同音〔ai〕である。

I, line, time, mine, wife, find, like, light, night, high, right, fight

これら〔ai〕は、すべて「ai」の綴りに變り、〔ai〕音の「eye, aye」も「ai」の綴りになる。

Ⅱの方針を適用して、歴史的假名遣のハ行の假名は語頭以外では「あは(粟)→あわ」「かひ(貝)→かい」の如く變更された。

英語でも同様に、「s」の一部は「z」に変る。「s」には「some, sing, stop」など無聲音の［s］の場合と、「as, is, does, rose, museum, resident, positive, laser」など有聲音の場合がある。有聲音の場合は綴りも「z」に變更されねばならない。

また「th」にも、無聲音の場合と有聲音の場合に對應すること、次例の通りである。

(thank, than)　(thistle, this)　(theme, then)

(thought, though)　(thumb, thus)

有聲音の場合、「dh」の綴りに變更される。同様に、同じ綴りで二種の音をもつ、次例の語などは、當然發音別の綴りに變更される。

「the」→「dha」「dhi」、

「live」→「liv」「laiv」

周知の通り「ough」には、八種の發音がある。これも、それぞれ、別の八通りの綴りに變る。その際、同音の下部の語などと統一した綴りにする必要がある。

bough—bow

tough—stuff

though—low

thought—taught

cough—off

hough—hock

through—true

thorough—rural

英語のほんの一部を取り上げただけであるが、「現代仮名遣い」の方針を適用すれば、以上の如く、大巾に綴りが變更される。この變更を、非常に簡明で、英語の兒童を丸暗記地獄から救濟するものと感じるのは、「現代仮名遣い」肯定派であり、反對に正書法の傳統を無視し、英語文化の斷絶を招くものと感じるのは、否定派である。讀者は果してどちらの側に立つか。

日本で、戰後の混亂期に十分な審議のないまま「現代仮名遣い」が政治的に施行されたのは、その根底に、日本語は漢字・假名の字數が多くて學習に困難であるとの先入觀が存在したからである。しかし、ユネスコの統計によると、イギリス・フランス・西ドイツ・ソ聯・アメリカなどでは、義務教育の總時間數の約五十％を國語に充てるのに對し、日本ではその半分の二十五％に過ぎない。この嚴然たる事實は、日本語が西歐の諸國語より遙かに學習しやすいことを、端的に示すものである。「現代仮名遣い」を眞に必要とするのは、西歐諸國ではないか。

（かしはだに よしひろ　元岡山大學教授）

送假名を伴ふ漢字の訓と訓讀み

上田　博和

表題に關る言説を検討してみよう。

戦前、ある外国の学者に日本語を教えていた時のことである。ある日、その外人が「集める」とあるのをアツマメルと読んだ。それを聞きとがめると、本の前の方を開いて、「集る」とあるのをさし、ここでアツマルと習った。「集」の字はアツマだから「集める」はアツマメルと読んだのだといわれて、これは「集める」はアツメルと読むと教えた。その時、同じ字をなぜ違えて読むのか食いさがられて、今さらのように漢字の読み、送りがなの不合理を痛感した。

（石黒修「読みやすい日本語に―送りがな・この厄介なるもの」図書新聞 1959.7.18）

戦後小学校の教科書で、「集める」「集る」を、「集める」「集まる」と送ることにしたのは、「集」のアツ、アツマの読みを合理化したものといえる。

（石黒修『ニッポン語の散歩』1960.4 角川書店 59 頁）

石黒氏は「集める」をアツメルと讀むこと「める」が送假名であることは知つてゐるが、漢字の訓讀みや送假名のなんたるかを知らないから、「集」の讀みは「集る」ではアツマであり「集まる」や「集める」ではアツであると思つてゐる。「集る・集める」は「漢字の読み、送りがなの不合理」で、「集まる・集める」は「読みを合理化したもの」だと言ふ。送り假名の本質を理解しないことから、石黒氏は漢字の讀みを誤解した。今の學者は漢字の訓を誤解する。

これについて、漢字の訓としては一字に同じよみをあてようとする立場をとったものである。たとえば、活用語尾だけ送るとすれば、「集る」「集める」ということになるが、「集る」とした場合、「集」には「あつま」のよみがあり、「集める」の「集」には、「あつ」のよみがあることになる。これを「集まる」「集める」とすれば「集」のよみはともに「あつ」になる。このような方針をとったものであった。

（古田東朔「明治以降の国字問題の展開」（佐藤喜代治編）『漢字講座 第11巻 漢字と国語問題』1989.6 明治書院 19 頁）

昭和14年ごろから、漢字に対する訓を一定にした送り

がな法が主張された。（明く・明かるい・明きらかに、助かる・助ける）

（古田東朔『国語概説』1959.5 くろしお出版 183頁）

古田氏は「集まる・集める」と送ることで、「集」といふ「漢字に對する訓」をアツに一定したと言ふのだが、一定にされたのは漢字に隠れる音節であつて、漢字の訓ではない。

常用漢字表の「集」の項には、訓〔あつまる〕の語例に「集まる」があり、訓〔あつめる〕の語例に「集める」がある。つまり、「集まる」に於る「集」の訓は〔あつまる〕であり、「集める」に於る「集」の訓は〔あつめる〕である。「集」の訓が「集まる」や「集める」ではアツになり「集る」ではアツマになるわけではない。そんなものは漢字の訓でも訓讀みでもなく、語の斷片にすぎない。

送假名が「る」でも「まる」でも、「集」の〔あつまる〕といふ訓に變りは無い。送假名が「ら・り・る・れ」や「まら・まり・まる・まれ」などの場合でも、訓讀みは「あつまら・あつまり・あつまる・あつまれ」と様々だが、訓はいづれも〔あつまる〕である。

長い訓には「こころざし」「まつりごと」「みことのり」「うけたまわ（る）」という5音節（拍）のものがある。

（計量国語学会編『計量国語学事典』2009.11 朝倉書店　笹原稿「日本における漢字の音訓の数」61頁）

「死」は音「シ」と訓「し（ぬ）」が一致し、「差」は音「サ」と訓「さ（す）」、「架」は音「カ」と訓「か（ける）」が一致するが、この類は偶然や当て字によるものと考えられる。

（笹原宏之『訓読みのはなし』2008.5 光文社新書 47頁）

笹原氏は訓を示すのに、「どれが送假名であるか」をも餘計に示して、「承」の訓を5音節と書く。「る」は送假名だから訓には入らないと思つたのか、「うけたまわ」までしか勘定しない。「死・差・架」の音と訓が一致すると書くのも、括弧内の假名を勘定に入れないからである。しかし、「うけたまわ・し・さ・か」は、それぞれの漢字に隠れる音節にすぎない。これらの漢字の訓は常用漢字表にもあるやうに〔うけたまわる・しぬ・さす・かける〕である。「承る」が「うけたまわる」であるだけでなく、「承る」に於る「承」もまた「うけたまわる」であることを、常用漢字表から讀み取る必要があらう。　（うへだ ひろかず　本會理事）

教育敕語と擴張ヘボン式による轉寫

上西俊雄

はじめに

平成二十三年十月三十日靖國會館偕行の間で開かれた教育敕語恢弘の集ひ、詔敕研究家佐藤雉鳴氏の講演があった。

氏はブルーノ・ビッテル法王使節代理「自然の法に基づいて考へると、いかなる國家も、その國家のために死んだ人びとに對して、敬意をはらふ權利と義務があるといへる。（中略）はっきりいって、靖國神社の燒却、廢止は米軍の占領政策と相容れない犯罪行爲である。靖國神社が國家神道の中樞で、誤った國家主義の根源であるといふなら、排すべきは國家神道といふ制度であり、靖國神社ではない」を引いて靖國神社が燒却を免れたが結果として國家神道の聖典である教育敕語が排除となった事情を「之ヲ中外ニ施シテ悖ラス」といふ句の存在から說明する。

中外とは國の內外すなはち世界だと解釋された。しかし文獻からしてまた文脈からして朝野と解すべきだと主張。言はれてみれば、畏れ多くも上御一人が話者であらせられる。文獻がなくともまづはさう考へるべきことではあった。但し、國の內外と解する向きが早くからあったことも事實。

戰後の國語政策をGHQの所爲とする人が多いなかで淵源は戰前にあったと主張して孤軍を託ってきたものとしては教育敕語を排除するに至ったことが必ずしもGHQの一方的な解釋の押し附けといふのでないといふ說に惹かれるものがあった。

斯ノ道ハ實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテといふところ、子孫臣民ノ俱ニ遵守スヘキ所といふところ、朕爾臣民ト俱ニ拳拳服膺シテといふところ、いづれも上御一人といふことから明快になる。ある學者から「俱ニ」の意味が初めて判ったといふ書が雉鳴子にあったといふのはこのことではないかと思ふ。

ネットで教育敕語の原文は簡單に手に入る。しかし振假名は文部省式のものしか目につかなかった。文部省方式では音便による眞の長音と同じ音の繰り返しとの區別がない。響きを正しく傳へるためにもと擴張ヘボン式で歷史的假名

遺を示した。精神が素晴らしいからと内容だけをいふことにも十分意味はあるだらうが、中外の解釋の如き、訓讀訓詁の重要性を再認識して、敕語そのものの大切なることをあらためて思った次第。

教育ニ關スル敕語
keuikuni kwansuru chokugo

朕惟フニ我カ皇祖皇宗
chin omo'uni waga kwauso kwausou
國ヲ肇ムルコト宏遠ニ
kuniwo hazhimuru koto kwauwenni
德ヲ樹ツルコト深厚ナリ
tokuwo tatsurukoto shinkounari
我カ臣民克ク忠ニ克ク孝ニ
waga shimmin yoku chuuni yoku kauni
億兆心ヲ一ニシテ
okuteu kokorowo itsuni shite
世世厥ノ美ヲ濟セルハ
yoyo sonobiwo naseru`a
此レ我ガ國體ノ精華ニシテ
kore waga kokutaino seikwanishite
教育ノ淵源亦實ニ此ニ存ス
keuikuno engen mata zhitsuni kokoni sonsu
爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ
nanji shimmin fuboni kauni keiteini iuni
夫婦相和シ朋友相信シ
fuufu aiwashi houiu aishinzhi
恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ホシ
kyouken onorewo jishi hakuai shuuni oyoboshi
學ヲ修メ業ヲ習ヒ
gakuwo wosame ge`uwo nara`i
以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ
motte chinouwo keihatsushi tokukiwo zhauzhushi
進テ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ
susunde kouekiwo hirome seimuwo hiraki
常ニ國憲ヲ重ジ國法ニ遵ヒ
tsuneni kokukenwo omonzhi kokuhauni shitaga`i
一旦緩急アレハ義勇公ニ奉ジ
ittan kwanki`u areba giyuu kouni houzhi

以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スヘシ
motte tenzhau mukyuuno kwauunwo fuyokusubeshi
是ノ如キハ
kakuno gotoki`a
獨リ朕カ忠良ノ臣民タルノミナラズ
hitori chinga chuuryauno shimmintaru nomi narazu
又以テ爾祖先ノ遺風ヲ
mata motte nanji sosenno wifuuwo
顯彰スルニ足ラン
kenshausuruni taran
斯ノ道ハ
konomichi`a
實ニ我カ皇祖皇宗ノ遺訓ニシテ
zhitsuni waga kwauso kwausouno wikunni shite
子孫臣民ノ倶ニ遵守スヘキ所
shison shimminno tomoni zhunshu subeki tokoro
之ヲ古今ニ通シテ謬ラス
korewo kokonni tuuzhite ayamarazu
之ヲ中外ニ施シテ悖ラス
korewo chuugaini hodokoshite motorazu
朕爾臣民ト倶ニ拳拳服膺シテ
chin nanji shimminto tomoni kenken fukuyoushite
咸其德ヲ一ニセンコトヲ庶幾フ
mina sono tokuwo itsuni senkotowo ko`inega`u
明治二十三年十月三十日
meiji nizhi`usannen zhi`ugwatsu sanzhi`unichi
御名御璽
gyomei gyozhi

付記

以上の部分をPDFにして送った年かさの友人、「小生は國民學校で教育敕語を校長が讀むのを聽くのが苦手でした。今の學校には無い講堂に全生徒が集合させられ、壇上で校長が教育敕語を開いて、兩手に持って讀み上げるのです。生徒は只管俯いて謹聽するのですが、このことが何とも嫌なことでした。

最後の〝ぎょめいぎょじ〟を聽いて、ほっとしたものです。さう言へば、昔の學校には〝奉安殿〟があり、その中に教育敕語が〝奉安〟されてゐて、式の前に校長が奉安殿から取り出し、恭しく奉じながら講堂へ入ってきたのです。」とメールがあった。

筆者は戰後教育の第一期生。奉安殿は殘ってゐて御眞影のことは聞いてゐたが教育敕語を聽いたことはなかった。以下なぜ擴張ヘボン式で轉寫したかについて一筆する。

戰後の表記改革は明治以來の漢字を廢し、表音的表記つまり假名やローマ字による表記を目指した運動の流れに棹差すものであったが、その根底には表記は二次的で音韻こそ基本であり、音韻は變化するものだとの考へがある。そして大學を出たほどの人であれば表記の混亂を當然とみるのだ。戰後の表記改革はかくして永久革命のごときものとなった。

ローマ字は單音文字、音節文字である假名より音に近いと目されるからだらうか、ローマ字で書き表さない假名は餘分だとされてヂやヅの使用は制限された。擴張ヘボン式は翻字式。假名を前提とする。ヂジを ji zhi と書き分け、ヅズを dzu tsu と書き分ける。これが戰前すでに朝河貫一博士の入來文書で用ゐられてゐたことは震災後に知った。博士も翻字といふことを標榜されてゐるが長音なるものを認める點で徹底してゐない。假名表記からすれば長音なるものは音便。一字一音といふことにこだはると音便はわからなくなる。

子音は英語的、母音は大陸的。促音は後續假名字母の父音すなはち假名字母の行のア段子音とする。chi はタ行なので t、ji はダ行なので d となる。但しハ行の場合でウ段であれば f とし、さうでなければ k とする。またナ行の場合は t とし、マ行の場合は p とし、語末で t とする。ハ行轉呼音つまり語中のハ行音は區切り符號とみて逆アポストロフィ（ASCII 0x60）で表す。ハ行轉呼音もワ行子音も視覺的意味しかなく、ア段でのみ兩脣半母音の渡り音として實現する。外來語のウィウェなどは ww で表す。撥音は兩脣音の前で m とし、それ以外では n とする。au は autumn のそれに等しく、eu は Europe のそれに等しい。これはハ行轉呼音の存在を妨げない。

なほ、本稿はメルマガ「頂門の一針」2424 號に發表したものに加筆したものである。

（かみにし としを　本會理事）

「ゐ」「い」、「ゑ」「え」、「わ」「は」等の音韻上の相違について

中井茂雄

ソプラノ歌手の藍川由美氏は大正時代の文部省唱歌「冬景色」の、「狹霧消ゆる港江の／舟に白し朝の霜／ただ水鳥の聲はして／いまださめず岸の家」を例にあげ、その中に含まれた「港江」の「え」、「聲」の「ゑ」、「家」の「へ」の三音はそれぞれ異なる音であると說かれ、實際に歌つて「え・ゑ・へ」は異なる音であることを示された。

このワ行の「ゑ」と「ゐ」に關して國語學者の山田孝雄は「文部省の假名遣改定案を論ず」（大正十四年二月發表）の中で次のやうに述べてゐる。（註・大正十三年十二月二十四日に臨時國語調査會において國語及び字音假名遣改定案が滿場一致で可決された。その第一に「ゐ」「ゑ」「を」を、「い」「え」「お」と同音であるといふ理由で廢棄するとしてゐる。）

「ゐ」「ゑ」の二音は發音上、「い」「え」となれりといふ論あらむ。如何にも國語調査會の例示せる如きにはその如く發音すといふを得む。されどこの文字のあらはす發音は國民間には存在せるものなり。

山田孝雄は「ゐ」と「い」、「ゑ」と「え」は異なる音であり、「國民間には存在せるもの」、すなはち國民の間で（意識するしないに拘らず）異なる音として使ひ分けられてゐると、はつきりと表明してゐるのである。そして「これは少しく聲音學の智識を有するものならば、誰にも心づかるべきことなり」と言ひ、「粗雜なる世俗的智識を以て俗人にこの音の有無を問ひ、彼らが無しと答へたりとて、直ちに無しとするが如きは大早計の事なりといふべし」と述べてゐる。

文部省は昭和二十一年十一月十六日に「現代かなづかい」を內閣訓令・告示として公布し、「ゐ」と「ゑ」をそれぞれ「い」「え」と同音であるとして廢棄した。

しかし、「居る」の「ゐ」は、「美しい」の「い」と同音であらうか。「思ひ出」の「ひ」も「い」となつたが、「思ひ出」の「ひ」は「居る」の「ゐ」も同じ音であらうか。これは斷じて同音ではない。「居る」の「ゐ」は「思ひ出」の「ひ」や「美しい」の「い」に比べ、遙かに強く重い「井」である。これは聲音學の智識など無くても、誰でも（少々思ひを凝らせば）納得のいくことである。「ゑ」も、藍川氏の指摘する如く、聲の「ゑ」は港江の「え」や家の「へ」と同音ではない。

「ゑ」の音を實感できる例として谷崎潤一郎の詠んだ歌を次に掲げる。

眼病の棟方志功眼を剥きて猛然と彫ゑるよ森羅萬象

「彫る」を「ほる」でなく、又「える」でもなく、「ゑる」とすることによつて、この歌は俄然力強い緊迫したものとなる。全神經を彫刻刀に集中させて一刀一刀眞劍に彫り込んでゆく棟方志功の姿が彷彿とされる。「ゑ」は「港江」の「え」や「家」の「へ」に比べ、力強く重い「ヱ」である。これは「抉る」「植ゑる」「据ゑる」「飢ゑる」等にも言へると思ふ。(「抉る」の「ゑ」は、「思へば」の「へ」と同じ音であらうか。現代假名遣では兩者とも同音として「え」としてゐる)。

山田孝雄はまた、次の如く指摘する。

かくて又「ゐ」「ゑ」の廢棄よりして五十音圖と伊呂波歌とは當然廢棄せらるゝに至らむ。國民は果してこれを容認すべきか。今伊呂波歌は姑く措き、五十音圖の如きは國語の組織を說明せむが爲に案出せられしものにしてこれによりて國語の理法に幾許の便宜を與へたりや量り知るべからず。然るに、これらの論者は多くは五十音圖の如きは舊時代の遺物と貶して學術上何等の價値なきものゝ如くいへるもの多し。

文部省は「ゐ」「ゑ」を廢棄したことにより、五十音圖を破壞し、日本語の音韻組織をも損ねたのである。

「現代假名遣」では一字一音、一音一字を原則としてゐる。すなはち一つの音は一つの文字(假名文字)のみで書くべきであり、一つの文字(假名文字)は一つの音の表記に限るべきであるとした。

從つて歷史的假名遣で「思はない・思ふ」と表記してゐたものを、「「思はない」の「は」は「わたくし」の「わ」と同じ「ワ」の音であるとして、文部省はハ行の活用を許さず、「思わない」とした。「思ふ」の「ふ」は「上野」の「う」と同じ「ウ」であるので、「思う」とした。

しかし「思はない」の「は」は、「わたくし」の「わ」と同じ音ではない。われわれは「思わない」などと強く(といふより重く)發音してゐない。むしろ子音hを附して「は」に近く輕く發音してゐる。又、「思ふ」の「ふ」は斷じて「上野」の「う」と同じ音ではない。

フランス文學者の市原豐太(元國語問題協議會副會長)は「言靈の幸ふ國」の第二編「國語の愛護」(昭和六十年)の中で次のやうに述べてゐる。

中學の光藤先生に教へられた動詞その他の活用は、五

十音圖の碁盤の目のやうに整然たる圖形の上に、きちんと配分されて目に浮びます。だから「思ふ」の動詞が、ハ行四段活用で、「思は、思ひ、思ふ、思ふ、思へ、思へ」であつたのに、新假名では「思う」と變へてア行に移し、しかも否定になると、「思わない」とワ行が闖入(ちんにふ)して來る無作法は、甚だしい「論理的不協和音」として私には堪へ難いのです。(中略)

感覺的に言つて、ハ行の音は、もう少しで消えさうに、柔かく輕いのに對し、ア行の方は明確な代りに硬いのです。「やはらかく」は如何にも柔軟な感じです。ア行に闖入するワ行に至つては、どぎつく重苦しくなります。「やはらか」と「やわらか」の差異。新假名遣で最も重大な誤りの一つは、音韻の美しさを顧みぬ、このハ行をワ行に移したことです。

又、このことに關して、福田恆存の「私の國語教室」の「第五章　國語音韻の特質」の中の次の文章を引用させて戴く。

問題の「は行」音が語中語尾において「わ・い・う・え・お」と同音となつたといふのは嘘であります。「現代かなづかい」が強制された最初、何よりもこだはつたのはそれであります。「思わず」「思い」「思う」「思えば」「思おう」と書けと言はれて、かなづかひは語を寫すべきか音を寫すべきかを問題にする以前に、たとへ音を寫すものとしても、これは間違つてゐると思ひました。さう書いてあるのを讀むと、今でも自分の口を無理にこじ開けられるやうな不快感をおぼえます。なぜなら、「わ」はもちろん、その他もそれほど明瞭な母音を發音してゐないからであります。ですから、當初、私はさういふ表記法に漠然と抵抗感をおぼえたのです。私ばかりでなく、大抵の人がさうだつたのです。音聲に忠實といふ意味でも、「わ・い・う・え・お」よりは「は・ひ・ふ・へ・ほ」を書くはうが自然だと思はれました。

「表記法は音でなく、語に隨ふべし」といふのがわれわれの主張である。歴史的假名遣は正にその原理のもとに成り立つてゐる。しかし、さうであつても、歴史的假名遣は日本語の音韻の美しい陰翳(ニュアンス)を見事に捉へてゐるのである。

(なかゐ　しげを・本會理事)

日中英　ことばの雜學

高田　友

健太：僕の親類に中國語專門の人がゐるんですが、言ふことが先生とだいぶ違ふんですよ。

高田：そりやあ、違ふだらうね。

健太：先生が、「我因她陷入戀了（ウォーインターシエンルーリエンラ）」を「我、她（かのぢょ）ゆゑに戀に陷ち入りたり」と讀んでいらつしやることを教へたら、「中國語を漢文みたいに讀むのは邪道だ。英語と同じやうに、一つの外國語だと思つて學ばなければいけない」と言ふんです。もちろん、僕は先生のおつしやる方が正しいと思ひましたけど。

高田：さういふ因循姑息なことを言ふ人が多いんだよ。日本人は漢文をやつてゐるから、初めから或る程度の中國語文法が身についてゐるんだ。それを捨てて、第一歩からやりなほせといふのなら、そのメリットがなくなつてしまふぢやないか。

健太：僕もさう思ひました。

高田：中國語やつてゐる人は進歩的な人が多いから、英語なんかでも、新しがりやの教育法をやつてみたくて仕方がないのさ。歌を歌つて英語を覺えるなんて、愚の骨頂だ。一氣にやればいいものを、わざわざ遠回りしてゐる。

健太：その御意見には大賛成です。

高田：中國語の辭書は、アルファベットで引くんだよ。ピンインと言ふんだがね。

健太：ひやあ、驚いた。ピンインを知らないときはどうやつて引くんですか。

高田：日本語と同じやうに、部首でも引けるが、面白いのは、中日辭典に、日本語の「音訓索引」が附いてゐることだ。

健太：それはまた驚きですね。でも、なるほど、日本人には一番引きやすいでせうね。

高田：さう思へるのは、君が賢い證據だよ。本格的な中日辭典が出來たのは、戰後になつてからなんだが、終戰後暫くの間は、「音訓索引」がついてゐなかつたんだ。

健太：解つた。僕の親類みたいに、「日本語の音訓で中國語を引くのは邪道だ」といふわけですね。

高田：そのとほりなんだ。流石に、音訓索引がついてゐないと賣れないといふことに氣づいたんだね。附けるやうにはなつたんだが、最初は申し譯程度のものだつた。

　僕は、小學館の中日辭典を使つてゐるんだが、第一版の音訓索引は、常用漢字程度で、しかも、音ばかりで、あん

まり訓が附いてゐない。頻度の低い漢字は、音訓索引で引くことができないんだから、話にならない。

ところが、第二版では、がらりと變つて、音訓索引を充實させたね。常用漢字以外の字も相當に收めてある。僕は專ら音訓索引ばかりを使つてゐるよ。

慾を言へば、「名乘（なのり）」を附けて慾しい所だね。

健太：名乘？

高田：人間の名前に使ふ漢字の讀み方だ。源頼朝の「頼」を「より」、「朝」を「とも」と讀むやうな類だね。漢字の音讀みは、同じ音が多いから、やはり訓讀みの方が引きやすい。しかし、殘念ながら、この漢字の訓讀みは何だらうと考へても、解らないことが多い。そんなとき、普通の訓讀みが解らなくても、人の名前で使はれてゐるのを思ひ出して、その訓で引ければ、便利なんだよ。「佐」は「すけ」、「淑」は「よし」、經は「つね」。

健太：中日辭典にはそれが出てゐないんですね。

高田：今擧げた五つの漢字の名乘は、どれも、小學館の中日辭典の第二版にも載つてゐない。それどころか、「よい」といふ項目はあつても、「よし」がないんだから、中國語と漢文の關聯性を意識的に切斷しようとしてゐるんだね。

健太：現代中國語つて、漢文みたいに讀まうと思へば讀めるんですか。

高田：うん。戰前は「時文（じぶん）」といふ學習法があつて、現代中國語を漢文式に讀む方法を開發してゐた。特に、中國に行つてゐた陸軍が兵隊に教へたといふことだが、漢文式と言つても口語と文語は適當に混ぜてゐる。「你是世上最有魅力的女人」（ニーシーシーシャんズイヨウメイリーダニュイレン）なら、「你（なんぢ）は是れ、世上最も魅力を有するの女人なり」といふふうに讀んで行くんだ。あるいは、「あなたは、これ、世上で、一番、魅力を有（も）つの女人である」なんて讀むこともあつたやうだ。「的」は「の」と讀めばいいんだ。

本格的に中國語をやらうといふつもりではなくて、とりあへず中國語を理解する爲には、非常にいい方法だよ。

これも、因循姑息な人は、「後で本格的に中國語を勉強しようとするときに邪魔になる」と言ふんだ。そして、彼らの常套句が「それは『邪道』だ」なんだよ。邪魔になんかなるわけがない。漢文だつて、中國語の邪魔にはならないんだから、時文だつて同じだ。

健太：邪道と言へば、先生の「語呂合はせで憶える英語」つて、僕は好きなんですが、友達の中には、「あんなの邪道だ」と言つて、嫌ふ奴もゐます。

だから、この前、僕は言つてやつたんですよ。「高田先生

だから、この前、僕は言つてやつたんですよ。「高田先生の授業が一番よく解るのは間違ひないんだから、邪道だつていいぢやないか」つて。

先生の「漢文訓讀式英文法」つて、いいですよね。

高田：ちやうど僕が教師になつた頃、天聲人語に「日本の英語教育は漢文訓讀式だから、いつまで經つても、英語でもの考へることが出來るやうにならない」と書いてあつたのを讀んで、「よし、俺は漢文訓讀式で行つてみよう」と決心したんだ。

健太：それつて、「反骨精神」といふんですかね。それとも、ただの「天邪鬼（あまのじやく）」でせうか。

高田：高校生に向つて、「英語でものを考へろ」といふ教師がゐるが、そんなこと出來るわけがない。子供のときから親しんでゐる母語でなければ、抽象的な思考は出來ない。

英語でものを考へるやうになつたら、難しいことは何も考へられなくなるんだぞ。「飯食ひたい」とか、「あ、美少年だ」とか、そんな單純なことしか考へられない國民になつてしまふ。

健太：「あの教師、毆りたい」とか。

高田：……。

健太：先生が、英文に返り點送り假名をつけて說明なさつたときには、ちよつと怖くなりましたが、考へてみれば、解りやすいですよね。「置き字」は「前置詞」なんだ、といふ話には感動しました。

高田：正道とか邪道とか言はずに、どういふ勉強法が一番能率的かといふことを考へてみるんだね。方法論に「正邪」があるはずはないんだから。

（たかだ いう　本會會員）

弘法大師の御跡を訪ねて

安藤路翠

眞夏の出羽三山吟行

「經書の大問題に逢着しては、『岐に臨みて幾度びか泣く』又、『緘を解きて良く見るに衆情滯ることあるも滾問する所無し』と眞理追及への苦しみを述べられたお若き空海様の御心境を東北の極限の暑さの中追體驗をする旅」

（月山）

日輪に環現れて夏の旅
神佛の習合處暑の出羽の霧
百合搖るる神と佛の彌陀ケ原
蠻擧なる廢佛毀釋の草の夏
敢然と神佛護りし夏至の出羽
空海忌慈悲の詩韻に抱かれん
夏さかる草蔭深き至聖の目
遙拜の出羽三山を喜雨覆ふ
夏の月風そよぎも神の息
幣白く身の洗れし雪解滾
青芒搖るるひろがり霧拂ふ
熱砂路を未來へ歩む行者衆
打水や阿闍梨の神庭淑氣滿つ
暑氣の碑の神の兎のいはれ說く
摺衣の羅の絹句吟の夕
慈しみて語る座敷へ朝の涼
夏座敷眞言界の響き
つつが蟲籠り堂の晝寢かな
護摩を焚く境內の煙涼しかる

（羽黑山）

百僧の合掌の呼吸大暑槇
羽黑嶺の巨き巖より草紅葉
靈山に垂れし朝の夏の雲
千年杉一夏眞言風に生む
夏の杉日輪まばゆく宙を翔け
青葉凪道はるけき行者影
狩衣と烏帽子の行者青嵐
羽黑古道天のしづくか桐の花
瀧ツ瀨に鐘の音かすむ行者杉
森嚴に國寶塔の蟬時雨
夏紅葉行者の法螺の音色炎ゆ

黒南瓜や濃霧の奥の大伽藍

（湯殿山）

百合搖るる神と佛の湯殿なる
湯殿山丹の大岩やホトトギス
みづかねと硫黄の湯治油蟬
岩をはふ硫黄や夏をはね返す
口遊は三光鳥か眞風清やか
下駄涼し飾り太刀帶ぶ裝束に
夏の巖無限のひろがり凝めゆく
夏霧にかくれし蝦蟇の讀經かな
數珠鳩のかくれて消ゆる青葉蔭
三山の女人結界麥の秋
三神の祭殿の法螺重き夏
豁然と仰ぐ大師へ大夕燒
含羞草須臾の喜躍を見出しぬ
靈山に神の氣くばり虹二重

（六九）

（あんどう ろすい　國語問題協議會評議員）

後　書

淺川哲也先生の近著『知らなかつた　日本語の歴史』では、琉球語が日本語と同じ系統に屬すとあつた。現代日本語にたいへん危機感をもつてをられ、「見れる」「食べれる」といつた「ら抜きことば」を容認せず、規範的な日本語使用の教育を輕視してはならないと警告されてゐて頼もしかつた。講演では、古代の發音がどうしてわかるのかに重點を置いて講演していただいた。

藍川由美さんは、前回は歴史的假名遣の方が日本語の歌をうたふのに適つてゐる、それどころか現代假名遣で歌ふことでどれほど意味がずれてしまふかといふ御話でしたが、今回はそれを國歌君が代の「いはほ」にあてはめての説明でした。更に、藍川さんが宮内廳樂部の岩波滋首席樂長から何年もかけて習つた古代日本の音樂、神樂歌や大和歌、久米歌などから、和歌披講の試し歌として長いこと練習のはじめに使はれてきた「君が代」を、復元した古代樂器「和琴」の伴奏で歌つてくれました。和琴はいくつもの埴輪像に見られるもので、祭祀をつかさどるために、弓を起原とする日本古來の樂器ださうです。一曲奏し了はつたとき、拍手が湧いたのを藍川さんは瞬時に制し、折角の魂振りをだめにしてしまふからと一言。日本藝能の基本にある問題と見受けましたし、ことばとのつながりの深さも感じました。

平成二十四年十月　　事務局長　谷田貝常夫

◇ 正統表記のための 實用工具紹介 ◇

「國語國字」通卷DVD 本會會報創刊號（昭和三十五年）より第一八五號（平成十七年）迄の全頁をDVD一枚に

電子畫像掲載 國語問題協議會發行

「今昔文字鏡」 単漢字16万字版 ver.4.52 CD-ROM

UnicodeのCJKV漢字はもちろん、諸橋大漢和辭典收録の約五萬字、古くは甲骨文字から梵字、中共の簡體字まで、多種多様な文字を收録。廣大な漢字世界を體系づけ、檢索、印字等その用途は無限！

發賣 株式會社式 エーアイ・ネット

平成疑問假名遣（平成十七年版）字音はもちろん動植物・地名人名、さらには企業名や專門用語まで、注意すべき言葉をあまねく網羅。最新の改訂は http://homepage3.nifty.com/gimon/ 參照。

國語問題協議會發行

正統國語ソフト「契冲」 ver.19.1 歴史的假名遣、正漢字をパソコンで完全表現！

字音假名遣による同音異義語の打分けにも對應。

有限會社申申閣（http://www5a.biglobe.ne.jp/~keichu/）

割引販賣中 特價一八，五〇〇圓（定價二八，三五〇圓の所）

インターネット　URL

國語問題協議會　http://kokugomondaikyo.sakura.ne.jp/

傳言板　http://d.hatena.ne.jp/kokugokyo/

關連電網

文語の苑　http://www008.upp.so-net.ne.jp/bungsono/

文字鏡研究會　http://www.mojikyo.org/

横濱五十番館　http://literature.jp/

㈲申申閣（「契冲」）　http://www5a.biglobe.ne.jp/~keichu/

平成疑問假名遣（高橋一郎）　http://homepage3.nifty.com/gimon/

日本漢字教育振興協會　http://www.kanji-kyoiku.com/

高池法律事務所　http://www.takaike.com/

地獄の箴言　http://kimura39.txt-nifty.com/

言葉の救はれ―福田恆存論（前田嘉則）　http://logos.blogzine.jp/1/

現代國語への處方箋　http://www.geocities.jp/kokugo_shohousen/